

矢作川流域圏懇談会 とは…

矢作川流域は矢作川沿岸水質保全対策協議会の活動に代表されるように、“流域は一つ、運命共同体”という共通認識のもとでさまざまな課題に取り組んできた歴史があります。

2009(平成21)年7月に河川法に基づいて「矢作川水系河川整備計画」が策定され、その中で治水、利水、環境、総合土砂管理、維持管理などの課題に対し、民・学・官の連携・協働による取り組みが必要であることが明記されました。これを受けて国土交通省豊橋河川事務所は2010(平成22)年8月、流域住民・関係機関も含めた話し合いを通じて連携・協働の取り組みを行うことで、流域圏全体の発展につなげることを目指す「矢作川流域圏懇談会」を立ち上げました。

矢作川流域圏懇談会は山部会、川部会、海部会で構成され、各部会で学識者・行政・関係団体・市民団体などのメンバーが連携して地域の課題を抽出し、その解決方法を探っています。また部会間の連携によって、持続可能な流域圏のあり方を模索しています。

山村再生担い手づくり事例集 とは…

矢作川流域圏懇談会山部会は、流域の山の問題を「人と山村の問題」と「森林の問題」に分けて整理しました。水源の森づくりを担う山村で過疎化と少子高齢化が進んでいるのが「人と山村の問題」です。解決の糸口として、矢作川流域で農業、林業、林産業、定住支援などの中山間地振興に携わる団体・個人の活動情報を共有し、生産者と消費者、農村と都市の住民、関連する団体・個人同士のネットワークづくりを支援する「山村再生担い手づくり事例集」の作成を提案し、実施しました。

この事例集によって流域住民の中山間地振興に関する意識を啓発することを目指すとともに、その具体的な支援方法を示します。そしてゆくゆくは流域内全域でお金、人材、物がまわり、食・エネルギー・水・医療・教育・安心安全の自治が達成されることを目指します。



目 次

長野県

根羽村

- 1 根羽村森林組合 1
- 2 ねば杉っこ餅 4
- 3 根羽村猟友会 6

岐阜県

恵那市

- 4 恵南森林組合 8
- 5 串原林業 11
- 6 NPO法人 奥矢作森林塾 14
- 7 NPO法人 福寿の里自然倶楽部 17

愛知県

豊田市

- 8 矢作川水系森林ボランティア協議会 . . . 19
- 9 とよた森林学校 21
- 10 とよた森林学校OB会 23
- 11 とよた都市農山村交流ネットワーク . . . 25
- 12 豊森なりわい塾 27
- 13 株式会社 M-easy 29
- 14 旭木の駅プロジェクト 32
- 15 千年持続学校 34
- 16 おむすび通貨 一般社団法人 物々交換局
. 36
- 17 green maman 38
- 18 農業生産法人 みどりの里 40

岡崎市

- 19 NPO法人 中部猟踊会・三州マタギ屋 . . . 42
- 20 岡崎森林組合 44
- 21 おおだの森保護事業者会 47

根羽村森林組合

調査団体名	: 根羽村森林組合	団体代表者名	: 大久保憲一
設立年	: 1951(昭和26)年	対応してくれた人の名前	: 今村 豊
団体URL	: http://www.mis.janis.or.jp/~nebasin/		
活動拠点	: 長野県下伊那郡根羽村407-10	調査員	: 洲崎燈子、高橋伸夫
取材日	: 2013年11月27日	レポート作成者	: 高橋伸夫

活動内容

従業員は43名。組合員の森林整備と生産木材の加工で年間総売上は4億円弱。年間200haの間伐を行っているが、材の搬出は52～60ha程度で材積5,000～6,000m³である。製材加工売上は2億2千万円程度であり、在庫の材や根羽村以外の材を含め年間約2,500m³を加工して工務店に直送している。住宅1棟あたりおよそ20m³なので、年間およそ130棟分にあたる木材製品を出荷している。

キャッチフレーズ

山の民の志で進める森づくりと木づかい

会のモットー(何を大切にしているか)

全ての森林資源を活かした持続可能な森林づくり、林業の理想を目指す。その担い手が森林組合であり、森林組合がまず中心となって持続可能な村づくり、地域づくりに率先して取り組む。

設立から現在に至るまで変化したこと

1995年からは再興期で、村内の民間製材工場の閉鎖に伴い村で設備を購入。2006年、建築士会に材料屋として入会(工務店や設計士の満足する製材加工をする)。2000年頃、乾燥技術の確立。2013年3月、JAS規格取得。現在、林産技能職員(約10名)の全てがIターン者である。

連携している団体・専門家・自治体など

安城市、明治用水、アイシングループ、信州大学農学部、岐阜女子大学、JIA長野建築士会(建築士・工務店)、矢作川流域圏懇談会

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

伐採・搬出の1次、製材次加工の2次、工務店への直送販売による3次の6次産業化。切り捨て間伐の未利用材を木の駅プロジェクトで収集し、特別養護老人ホームの薪ボイラーで使用するNPO「薪の駅」の設立を2014年4月に計画しており、材の収集・乾燥から燃焼までの作業を4,500円/m³で担当する。小中学生まで木の駅プロジェクトの登録対象として、地域通貨がお小遣いになるようにする。

現在直面している課題

- ・製材加工の利益率向上。全ての地域資源を活かした産業の創設による雇用と生業の確保。
- ・Iターン職員の定着率向上。

今後やってみたいこと

JAS工場の資格を活かして矢作川下流域への販路拡大を図りたい。このため、長野・愛知・岐阜・静岡の各知事に木づかいプロジェクトリーダーになってもらい、根羽村村長を含めた5者での対談を企画したい。建設予定の小さく住まう魅力的な木の住まいをモニター体験しながら、林産資源の活用や田舎暮らしの良さについて話し合う中で各県の対策事例の紹介や情報交換を行い、行政の壁を超える協力体制などを構築してもらおう。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

3県の森づくり・木づかいのキーパーソンを発掘し、森づくり・木づかい推進のワーキングショップ・ブレインストーミングを行いたい。キーパーソンとは各県の林業普及指導員、地域材中心の工務店、木工クラフトマン、建築士、建築士グループ等の木づかい推進団体と、耕ライフ、とよた森林学校等の木育活動団体など。彼らが既に行っている取り組みをライフステージアタック表(各ライフステージでの木づかい推進アイデアを一覧表にしたもの)の実践活動として紹介し、さらに多くの市民を森づくり、木づかいの世界に誘いたい。

チームオリジナルの質問

<質問内容>1ターンの定着率は？ 定着率向上の対策は？

<答え>定着率は正直に言って良いとは言えない。自分の技能や生活水準を上げることが優先して、地域よりも個人の力としたい考え方の者もいる。技術を習得した3年目程度で転出されると落胆が大きい。本人の問題でなく、同伴者が地域になじめない場合も定着を阻害する。根羽村での林業を志す1ターナー者に対して「根羽村森林組合 基本理念・存在意義」というマニュアルを作成配布して、組合や作業の詳細説明からモチベーションの維持方法、根羽村へのなじみ方などを解説。

チームオリジナルの質問

<質問内容>低コスト造林に着目した理由は？

<答え>山主へ還元金の確保が必要。職員の各種保険や手数料等でもコストが掛かるので、補助金もできる限り確保して林産収入を補填したい。間伐を15~20mの帯状伐採とすれば3回程度に分けて伐採ができる。伐採と同時に植栽も行えば植栽の補助金も受けられ、コンテナ苗を使用すれば作業効率も高くなる。さらに獣害対策を施せば、獣害対策補助金も受けられる。伐採跡に人工芝を敷いて獣の動きを変え、罠にかかりやすくするなどという案もある。

その他、伝えたいこと

●**トータル林業の実現**:「トータル」には根羽村の全員が組合員であることと、木の全てを活かすという意味を含む。材として使用される部分はもちろんのこと、端材や木の皮・オガ粉なども残らず利用する。以前は材の乾燥に灯油を使用していたが、現在はこうした木くずを活用している。さらに、枝は小型ストーブの燃料に。また、葉からアロマオイルを抽出できないかなども検討。

●**長野県以外への進出・拡販**: 村民全てを森林組合員とする政策を継続して人工林率73%。村で木材加工工場を保有して今年JAS規格を取得、準備は整ったわけである。この根羽村で林業が成り立たないとすれば、国内どここの林業も成り立たないということである。矢作川の水源として下流域から認められ交流してきた歴史もある。矢作川の流域である愛知県に根羽村の森林製材を普及させたい。また、同じ流域で疲弊している林業を回復するために根羽村の製材工場やノウハウを活かしたい。例えば、豊田市産の材を根羽で製材し、JAS製品とするといったことが考えられる。

●**里山資本主義**: 里山の産物を活用し、流通させたい。豊田市足助地区の香嵐渓は里山を観光資源として確立した成功事例。すてきな森と木と水、そこで過ごすすてきな時間は商品になる。そこで生まれるスモールビジネスを生業にしたい。

写真



根羽杉の家で見学者に説明する
今村氏(右)



低コスト造林試験地



プロセッサによる造材

年表

年	できごと
1958 昭和33	村内各戸へ13haの貸付山制度実施
1966 昭和41	貸付山貸付料廃止(年間800円)
1979 昭和54	矢作川水質保全対策協議会へ加入
1981 昭和56	根羽中学校が安城市七夕祭りに招待(以後毎年)
1982 昭和57	根羽村森林組合が全国優良組合として表彰を受ける 安城市野外教育センターが茶臼山に完成
1992 平成4	緑化推進運動功勞により内閣総理大臣表彰を受賞
1995 平成7	村内民間製材工場閉鎖に伴い、村で設備を購入
2005 平成17	長野県ふるさとの森林づくり条例に基づき「森林整備保全地域」に全村指定 根羽杉の柱50本提供事業開始 アイシングループと森林の里親契約を締結
2006 平成18	「ふるさとの森づくり県民の集い」を根羽村で開催 根羽杉モデル住宅「杉風(さんふう)の家」完成 川上村・根羽村村有林交換盟約書調印
2009 平成21	組合事務所の改築。「森づくり」と「木づかい」の職場が同じ場所になる

2006～2012年 製材加工場施設の拡充(製材・加工・乾燥機、構造材用モルダー、木質ボイラー)

ねば杉っ子餅

調査団体名 : ねば杉っ子餅
 設立年 : 1999(平成11)年
 団体URL : http://nebakanko.com/shisetsu/neba_sugikkomochi.html#
 活動拠点 : 長野県下伊那郡根羽村1855
 取材日 : 2013年11月27日

団体代表者名 : 石原みちゑ
 対応してくれた人の名前 : 石原みちゑ、原 小夜子
 調査員 : 洲崎燈子
 レポート作成者 : 洲崎燈子

活動内容

根羽村の40～70代の主婦15人ほどの団体で、原木椎茸を使ったきのおこわ、よもぎの草大福、米粉を練ったからすみ、ねぎ味噌たれの五平餅など、地元の素材を活かした手作りの農産加工品を生産し、自家製の野菜とともに村内外のイベントで販売している(主に週末)。岐阜女子大学の学生との共同で、森林組合が根羽杉で作った弁当箱に根羽の山の幸いっぱいのお弁当を入れた「根羽のはこいり娘」も開発した。村内のイベントや仏教行事での食事の提供もっており、250人分の食事を作ることもある。

キャッチフレーズ

地産地消で生涯現役！

会のモットー(何を大切にしているか)

根羽にある物を使う、根羽にいる人を使う。お客さんとお互いの顔が見える対面販売にこだわる。からすみや豆餅など伝統の行事食を定番の商品にして、根羽の味として伝えていく。村の農産物を使うとメンバーも張り切って野菜を作ってくれる。メンバーには「家に引きこもらず、体が動くうちは来て」「この仕事がある日は限られているので、こちらを優先して」と働きかけている。メンバーが培ってきた知恵や技術を活かし、お客さんに喜んでもらうことの生き甲斐を感じられる場になっている。

設立から現在に至るまで変化したこと

何度も試食し、お互いに注意して真剣に商品開発を行うようになった。お客さんの反応もよく見るようになり、商品を食べてもらうことに緊張感を感じるようになった。イベントに出店する時、経験に基づいて出店先の客層や天候によるニーズの違いを見極め、売る商品や量を変えたり、売り手も買い手も運ぶのが大変な重量級の野菜(大根、白菜など)を避けるなどの工夫をするようになった。年収が500万円に届くようになった。

連携している団体・専門家・自治体など

根羽村、安城市、アイシン、株式会社JTN、岐阜女子大学など。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

村内の主婦に、負担にならない勤務体制で、子どもを抱えて正規で働けない人や自営業者の奥さん、定年退職者にも末永く働ける場を提供している。メンバーの中には70代後半で入院しても「杉っ子餅に行かなきゃ」と言い、退院したら杉っ子餅に戻って亡くなる寸前まで働いていた人もいる。

現在直面している課題

・現在は石原、原の両氏で会を取り仕切ってうまくやっているが、後継者の確保が課題。新しい人も少しずつ入っているが、責任を持ってやってくれるかは未知数。
 ・本当は毎日、半日でも活動できるといいのだが、取り扱っている商品に餅など日持ちがしない物が多いため、販路がはっきりしないと難しい。

今後やってみたいこと

日持ちする商品が少なく、根羽村の複合施設ネバーランドなどでの販売が難しいので、冷凍できるからすみ(カット済み)を随時解凍して販売できるようにしたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

ネバーランドなどとの商品情報の共有と連携。

チームオリジナルの質問

<質問内容>活動している上での苦勞を教えてください。

<答え>村外のイベントに出店する際は深夜2時、3時から準備を始めることもある。そんな時も、活動日が限られていることもあるが、メンバーが積極的に出てきてくれるのがありがたい。活動場所(旧保育所)の隣が墓地で夜は少し怖いですが、今は昔と違って火葬だから大丈夫と皆で言いながらやっている。

チームオリジナルの質問

<質問内容>原木椎茸ほか、きのこの栽培について教えてください。

<答え>村内できのこの原木となる広葉樹を販売している。きのこおこわの椎茸は村内で原木栽培している方から買ったり、メンバーが自前で少量栽培しているものを持ち寄って調達している。原木はほとんどマキ(アベマキ)で、樹皮が厚いためとても長持ちする。シデの木も原木にするが、椎茸は早く出るものの、樹皮が薄く長持ちしない。シデ、サクラはナメコ栽培にも使う。

その他、伝えたいこと

組織が続かないと元も子もないので賃金の大幅アップはできないが、年末にささやかながら各メンバーが働いた時間に応じた手当を支払う。するとメンバーのやる気がアップする。今年度は収益で初めて旅行に行く(なばなの里)。個人経営ではないので、黒字になればその分を分け合う(機械の修繕代を除いて)。活動を続けてこられたのは、メンバーそれぞれの家族が応援してくれていることも大きく、ありがたい。

写真



原さん(左)と石原さん(右)



よもぎ大福作成風景



「根羽のはこいり娘」の弁当箱



心温まるおもてなし。右下が名物のからすみ

根羽村猟友会

調査団体名	根羽村猟友会	団体代表者名	石原邦雄
設立年	50年ほど前	対応してくれた人の名前	西尾竹司
団体URL			
活動拠点	長野県下伊那郡根羽村	調査員	高橋伸夫、洲崎燈子、安藤里恵、鈴木啓佑
取材日	2013年12月9日	レポート作成者	鈴木啓佑

活動内容

昔は各家の玄関に火縄銃が掛けてあり、昭和初期くらいから各部落ごとに猟をしていた。根羽猟友会として一つになったのは50年ほど前。
 現在猟友会は総員20名。猟銃所持者は全部で13名、内、空気銃1名でほとんどは罠と銃を両方とっている。その他は罠猟免許のみ。
 猟期(銃)は11月15日～2月15日(罠は11月15日～3月15日)、その他期間は駆除期間として罠猟のみをしている。有害鳥獣駆除隊を昨年7月から新たに結成。特にシカとサルの食害がひどく、住民が困っている。サル、シカ、イノシシ、カワウ、アオサギは一年中、申請して報告があったらすぐに飛んでいけるように対応している。
 シカは昨年度は244頭捕獲、4月から11月に260頭捕獲した。ほとんど「くくり罠」で捕獲している。長野県では猟期は12cm、それ以外の駆除期間は20cmの罠を使用している。「箱罠」はほとんど入らない。厳冬期はほとんど「巻狩り」で捕獲する。厳冬期のくくり罠は凍り付いてしまい、正常に作動しないことが多いのであまり使い物にならない。根羽村では2007(平成19)年8月に、村が獣肉処理施設をネバーランド内につくってくれた。以前は野原で解体をしていたが、暗くなると車のライトで照らすも自分の陰で見えなくなったり、風があれば木の葉等がかかり衛生面でもよくなかった。今では食肉として売れるようになった。シカがメイン。獣肉は半分はネバーランドに卸して、半分くらいを仲間ですべてさばいている。イノシシも真空パックして、ラベルを作って売っている。シカは全てネバーランドに卸し、ネバーランドが商品化している。愛知県へも、名古屋市内のホテルに毎年クリスマスには20kgから30kgのシカのロースを納めている。収益はそれほどない。肉自体が高ければ料理も高くなってしまふ。だから、損得勘定を別にして、根羽村のネバーランドが捕れた肉を活かして商売してくれればそれでいい。1頭捕っても何千円くらい。

キャッチフレーズ

鉄砲撃ち、昔は道楽もん、今は人助け

会のモットー(何を大切にしているか)

住民が困らないように有害鳥獣を駆除することが猟友会の使命。

設立から現在に至るまで変化したこと

いろいろ規制が変わり、それをクリアしていかなければならないことが大変。特に2007年の佐世保の散弾銃乱射事件以降、銃刀法が改正され厳しくなり、他の地域では半数近くの人が猟友会をやめた。後継者が少なくなった。

連携している団体・専門家・自治体など

有害鳥獣駆除隊の事務局を根羽村役場内に置いている。隊長は村長。
 他地域猟友会

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

- ・獣肉処理施設:村内集客施設ネバーランドに併設した処理施設により、駆除した獣肉を衛生的に処理し販売できるようになった。
- ・有害鳥獣駆除隊:射撃試験免除などで、狩猟免許を更新しやすくしている。また、サル、シカ、イノシシ、カワウ、アオサギは通年捕獲できるように申請を出し、速やかな対応ができるようにしている。

現在直面している課題

猟友会員が少ない上、後継者も少ない。西尾氏が現在67歳。氏より若い方は5名しかおらず、10年後どうなっているのか心配している。
猟銃所持者は上矢作町で3名。津具村も少ない。平谷村も3名。売木村も少なくなった。根羽村は多い方。根羽村ではもともと各戸に猟銃は1丁あった。それくらい盛んだった。

今後やってみたいこと

シカの皮をなめして利用したり販売してみたい。

チームオリジナルの質問

<質問内容>昔から猟が盛んだったようですが、もともと獣は多かったのでしょうか。

<答え>もともと多かったのでしょうか。

シカはもともとはいなかった。初めて見たのは12、3年前でそれから一気に増えた。

クマも増えている。毎年1頭か2頭は人家のすぐ近くに出没する。

イノシシは減っている。逆にシカが増えた。イノシシは夜行性で昼間寝ているが、シカは昼夜関係なく活動している。

イノシシの睡眠をシカが邪魔をするので、イノシシがいやがって愛知の方へ移動していると思われる。

カワウも10年くらい前から増えだした。カワウは魚350g/日くらい補食するといわれている。海にいる頃は人間の利用しないボラを主に補食していたのでよかったが、河川では大きな被害となる。カワウは3月から13羽、アオサギは1羽か2羽しか駆除していない。カワウが増えだしてからヤマセミが減った。

サルは増えているか減っているのかわからない。多い時には60、70頭くらいの群れで現れる。

アライグマも増えた。今年度も6、7頭死んでいるのを見た。

ハクビシンも出る。よく轢かれて死んでいる。

その他、伝えたいこと

今では各自治体における害獣駆除の補助金も多く出されるようになり、猟師を生業にする若い人も出てきた。サルは罠でも捕れるようになったが、銃の方が多し。罠は1人30個しか設置できない。それを見回る必要があるため、勤め人では難しい。

写真



自家製シカ肉の薫製とイノシシ肉(商品)を見せる西尾氏



根羽村ネバーランド特製“肉のくわちゃんシリーズ”『いのししのタカ!』

恵南森林組合

調査団体名	: 恵南森林組合	団体代表者名	: 山内章裕
設立年	: 1999(平成11)年1月(5組合合併)	対応してくれた人の名前	: 大島徳雄 専務
団体URL	: http://k-nan.jp/		
活動拠点	: 岐阜県恵那市 恵南地域	調査員	: 蔵治光一郎、近藤 朗、安藤里恵、田中五月
取材日	: 2013年12月11日	レポート作成者	: 田中五月、(近藤 朗)

活動内容

1999(平成11)年に上矢作町、串原村、明智町、山岡町、岩村の5森林組合の合併により誕生した岐阜県で3番目の広域合併組合であり、この恵南地域の83%にあたる約27,400ha(国有林 4,800ha、民有林 22,600ha)の森林を管轄している。事業は、これらの森林・作業道整備、特殊伐採が主である。2005(平成17)年度の組織改革後、国有林のみならず民有林の間伐増大、経営計画作成にも着手し、境界確定作業も担う。

●**組織改革** …… 合併後、2004、05年度に赤字となり危機感が芽生え、2005年度(下期)より大幅な組織改革、職員の意識改革に着手した。2006年度から事業量増大を図り、民有林伐採にも着手、短期間で黒字に転換できた。

●**東濃・森林づくりの会** …… 民間企業と協力した民有林整備体制の構築を目指し、特定非営利活動法人として立ち上げた(設立は2012年)。この串原支部が串原林業の三宅大輔氏であり、民間事業体として森林経営計画を策定した成功例である。

●**森の健康診断** …… 矢作川森の健康診断の恵那地域第1回目(2006、07年)では、平均密度1,679本/haであったものが、第2回目(2012年)では1,360本/haに減少した。これは5年間でこの地域の間伐が著しく進んだということであり、恵南森林組合の事業転換(民有林増大)と重なる。

キャッチフレーズ

森の資源を活かし守り想う ～ それぞれの地域にフォレスターを! ～

会のモットー(何を大切にしているか)

環境に配慮した適切かつ持続的な森林管理を進めることで、組合員と地域社会に貢献するとともに、働く仲間とその家族の幸福を追求する。(HPより) 林業本来のあるべき姿を追求したい。

設立から現在に至るまで変化したこと

国有林伐採、治山事業など公共事業主体であったものが、経営危機(2004、05年度)を契機として民有林にもシフトしていったこと。この時(2006年度～)は、年度末に余ってくる補助金にはすべて手を挙げるなどして、事業量を大幅に増大させた。

なおこの頃には、経営改革として、組織も大きく変えた。職員自らが問題と向き合い、考えることが重要である。

連携している団体・専門家・自治体など

岐阜県森林組合連合会、東海木材市場、岐阜県庁

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例: 小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

●東濃・森林づくりの会をつくり、民有林の整備促進(支援)を進める

森林組合だけの整備能力には限界があり、多くの民有林の整備を進めることはできない。やる気のある民間と森林組合が手を組んで整備を進めたい。そのためには、森林経営計画を策定する必要があり、そのコンサル的な支援を行うための会として立ち上げたものである。

全体としては、まだ思うように進んでいないが、その中で串原林業は自ら経営計画を立てている。その代表である三宅大輔氏は、かつて恵南森林組合の職員であり改革期を経験している。

別パターンの手法として、森林組合が経営計画を立てて、作業を民間業者が行うケース(松下薪材)もある。

現在直面している課題

経営は持ち直したが、材価はまだまだ落ち込むと考えており、これからさらにどのような方向に行くのか悩んでいる。大きな課題である。

今後やってみたいこと

国有林には森林官がいる。それぞれの地域、民有林にも、森林官「フォレスター」がいるような状況をつくりたい。そのような人材が地域の森林を見守り、育てていくというのが良い。

そのためには、地元の若者が林業に関わり、将来的に独立する流れが良い。

民有林では山主との関係性が難しいが、「あそこのせがれかー」という感じで受け入れられやすい。

(串原林業・三宅さんの「山主さんたちが協力的で作業がしやすい」という話と通じる)

一方、従業員募集には、1ターン者の応募が多い。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 今後、どのようなパートナーがほしいか?

<答え>

●材木のはけ口がほしい。いつまでも市場に出してて良いのかと考えている。市場に出すと、数日後にはお金が入るといふメリットはあるが、手数料で金額が安くなるというデメリットも大きい。今は製材所などに直接卸すということができていない。

<質問内容> 森の健康診断の1回目と2回目で、大幅に平均密度の数値が減少していた。これは、恵南地域で広域的に間伐が著しく進んだ結果である。面積的にも大幅に民有林に手を付けない限り達成できない数字であるが、なぜ、このようなことができたのか?

<答え>

●実際に民有林での間伐を進めたが、「組合がつぶれてしまう」という危機感が、これをできるようにした。愛知県などでは、施業単価が高いため、わざわざ民有林に手を付けるということにはならないのではないかと。

その他、伝えたいこと

●林業を実施していくにしても、地域に運送業者や機械(重機)業者、土建業者が必要で、できる限り地域の会社と協力して仕事をしていきたい。地域のリスク管理(災害、雪対策)でも、このような業者は必要であり、われわれは地域と共存していかなければならない。



恵南森林組合事務所(恵那市上矢作町)



取材に答える恵南森林組合の大島徳雄専務

串原林業

調査団体名	串原林業	団体代表者名	三宅大輔
設立年	2007年	対応してくれた人の名前	三宅大輔
団体URL	なし		
活動拠点	岐阜県恵那市串原	調査員	近藤 朗、蔵治光一郎、安藤理恵、田中五月
取材日	2013年12月10日	レポート作成者	田中五月

活動内容

現在の従業員は3名、2014年4月からは農業部を立ち上げ5名体制となる。恵那地域で初めて、民間事業体で経営計画を作成し、交付金をもらって林業を実施している。

現在は20～30人の山主のものである50haの森林の経営計画を立てている。

民間事業体で林業を行うことは非常に大きな意味がある。旧来の森林組合だけの林業では、交付金をもらうための計画となってしまう、本来の山づくりとはかけ離れた状態となっているケースが多かった。

一方で、三宅さんのように意欲のある民間事業体だけでやろうとしても、経営計画の作成、交付金の申請、交付金情報の収集など、民間事業体だけでは難しいことが多々存在していた。

これを、恵南森林組合と協力して、民間事業体でも経営ができる状態としている好事例。

会のモットー(何を大切にしているか)

串原の山守となる。
山だけでなく、串原の地域も守る。

設立から現在に至るまで変化したこと

6年前に独立したものの、最初は森林組合の下請けだったが、2013年度からは自力で経営計画を立てることができるようになった。

自力で経営計画を立てることにより、木が非常に傷みやすい夏場は「伐らない」と決めることができるようになった。

連携している団体・専門家・自治体など

恵南森林組合、恵那市 林業振興課、恵那市 串原振興事務所、恵那農林事務所 林業課

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

三宅さんが恵南森林組合で働いていた時期、毎日遠くの国有林まで移動して、林業を行っていた。移動中、車の中から「串原の山を整備したい、何とかしたい」という思いを何度も強く抱き、独立を決意。

独立後は、2013年に経営計画策定までこぎつけ、2014年には地元の高校生が就職することが決まっている。

「地元串原の山を、地域を守る」という思いで、さまざまな計画を作成中。※〈今後やってみたいこと〉に記述

現在直面している課題

A材は市場で売れるが、B材以下は市場では売れないので、何らかの対策を考える必要がある。

例えば、市場に卸すのではなく、地域で「少々の曲がり問題はなし、この地域の木材で家を建てたい」という方々に直接売るなど。

今後やってみたいこと

1. 串原林業のストーリーを付加価値として、市場だけでなく、直接工務店や消費者に届けられるような形にしたい。
⇒xx年後にこんな山を目指して林業をしている、林業と農業で串原を元気にする、B材/C材は地元温泉で薪利用など。
2. 串原農林業という形にしたい。
⇒前述のように夏は木を伐らず、代わりに農業を行う。今ちょうど、大学などの学食の料理を作る名古屋の会社に収穫物を売るといった話があり、進めたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

串原林業が大事にしている「技術」と「ソフト面での戦略」を担ってくれる、もしくはサポートしてくれる人が必要。
⇒調査チームが考えるには、名古屋など都市部にも串原林業のソフト面での戦略を支えるパートナーがいると良いと感じた。

その他、伝えたいこと

本職が林業なので「串原の山を守っていききたい」という思いが非常に強いが、それだけにとどまらず、へボ祭りなどの文化継承、観光案内所などのような町のインフラづくりも併せて行い、「串原を守っていききたい」「子どもたちに誇れる串原にしたい」という思いが強い。

社会背景として、行政の人員削減、助成金などの減少からくる町のインフラ会社(土建屋など)の減少があるため、三宅氏のように本職だけにとどまらず「地域全体をなんとかしたい」という思いを持つ人の存在は、農山村社会に非常にインパクトがある。また、今後の農山村社会ではこのような人がどの町や村にも育っていく必要がある。串原林業としても、林業だけでは経営が難しい時期が来ても、農業や土建的な仕事で会社を安定させることができるし、串原の住人からしても「串原林業であれば、たいていのことはやってくれる」となると、安心して生活できる。

4月から農業部門を設立し、串原林業から『串原農林』と名称を変更する予定。

調査チームからも、林業だけでなく、へボ文化継承などを含めて、広く地域に役立つ会社になるとよいのでは、という意見が上がった。

写真



現場で三宅氏に説明を受ける調査員



こんな50年クラスの檜が、市場卸値67,000円とのこと。
林業従事者でなくとも、何とかしたい！と思ってしまう



パートナーの方が作業道をつくっている最中だった



現場にある移動式製材機(40cmまで製材可能)

NPO法人 奥矢作森林塾

調査団体名	: NPO法人 奥矢作森林塾	団体代表者名	: 大島光利
設立年	: 2006年	対応してくれた人の名前	: 大島光利
団体URL	: http://shinrinji.enat.jp/		
活動拠点	: 岐阜県恵那市串原地域、上矢作地域	調査員	: 眞木宏哉、浜口美穂
取材日	: 2013年12月8日	レポート作成者	: 浜口美穂

活動内容

2000年の恵南豪雨により、一夜にして3万7千㎡もの流木が矢作ダムに流れ込んだ。この災害の時、消防長だった大島さんは、山林が荒れていることを身をもって実感し、同志に呼びかけて定年退職後の2006年、同会を立ち上げて山林(里山)再生、水質保全、森林環境教育に取り組み始めた。

そのうちに空き家が増え始め、活用を考える中で、2008年に空き家調査・意向調査・データ分析を行い、2009年には、移住希望者や都市の人も巻き込みながら「古民家リフォーム塾」も始めた。

同団体のスタッフは5人だが、地元住民、移住者などに手伝ってもらいながら事業を進めている。

<里山再生>

●炭焼き・・・ダムに流れ込む流木を一度に大量に炭化する大型窯、伝統的な黒炭窯、ドラム缶を利用した研修窯3基があり、研修窯は地元小中学生の森林環境教育に使用。流木炭は、リフォームした家の床下調湿、土壌改良、水質改良に活用。木酢液からディーゼル燃料を抽出するほか、稲のイモチ病を抑える実験をしている。

●河川環境整備・・・河川に流木炭を入れて水質保全。地元住民・小中学生と、養殖したカワニナとホタルの幼虫を放流し、ホタルの里づくりを行う。河川の草刈りの応援、生きもの調査などによる環境教育も。

●「里山ぼらんていあ」・・・毎月第2日曜日に実施。古民家の手入れ、田んぼや畑仕事、山仕事など。

●公園環境整備・・・草刈り、剪定、間伐材でベンチづくりなど。

<田舎と交流、移住につなげる取り組み>

●古民家リフォーム塾・・・毎年、1泊2日で10回講座を実施。地元の大工さんが指導。現在は、移住者待機住宅として利用予定の旧串原駐在所をリフォーム中。

●里山体験イベント・・・どんど焼き、つるかご編み、へぼをぼう、中山太鼓体験、縁会(独身男女ふれあい交流)、等々。

●田舎暮らし体験館「結の炭家(すみか)」・・・リフォーム塾で一番初めに再生した築130年の古民家。宿泊し、田舎暮らしの体験ができる場、地元の人と交流できる場にしている。

<指定管理者として運営>

●奥矢作レクリエーションセンター ●串原体験道場「創手味亭(つくってみてい)」 ●串原郷土館

<情報発信>

●広報誌「山結人(やまゆいびと)」を発行・・・新聞折り込みや、串原地域では市の広報紙と一緒に全戸配布し、地域に会の活動を発信している。

キャッチフレーズ

みんなでやろまいか

会のモットー(何を大切にしているか)

地域を訪れる人、移住者、地元の人、みんなで一緒に地域をつくっていこう。

設立から現在に至るまで変化したこと

流木が活動の原点で、設立当初はやらざるを得なかった。今は楽しみながらやっっていこうと変わってきた。慌てることはない。頑張りすぎると続かない。

連携している団体・専門家・自治体など

地域組織、串原林業、立教大学・野中健一教授、岐阜県立森林文化アカデミー、東京大学・蔵治光一郎准教授、矢森協など多数。また、恵那市のNPO連絡協議会をつくる動きもある。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

●空き家ゼロを目指す移住促進活動

空き家調査から始まり、意向調査をしてデータ分析。空き家のオーナーに傷み具合などを連絡。古民家リフォーム塾では、地元の大工さんの指導の下、田舎暮らしに興味がある人、移住希望者などが集まり作業を行う。完成したら、地元の人を交えて交流会。その他、移住のための山水の引き方研修、野菜の育て方研修、チェーンソーの研修などを1泊2日で年3回ほど行っている。その他、空き家の相続の書類を揃える手伝い、高齢者施設入所者の家の管理、移住者の相談にも乗る。リフォームには6~8カ月間かかるが、この間を、移住者と生活を共にして串原地域を理解してもらう期間としている。

大島さんいわく、「移住希望者にメリットは説明しない。メリットは全国一律どこも同じ。だからデメリットしか説明しない。全部ありのまま見せる」。移住者は、地域の自治会に入ることが前提。住民会議のどこかの委員会に所属し、すぐに地域の人と一緒にイベント・祭りの実行委員になる。移住した人は「串原の人」という扱いを受け、それは「受け入れてもらえたという安心感につながる」。

この6年間で空き家を10棟リフォームし、27人が移住。移住者は千葉から大阪まで広範囲。情報源は口コミ、HP、DM、取材記事など。さらに移住希望者は14名いて、空き家を待っている状態。一日でも早く移住希望者が古民家で暮らせるよう努力している。

2013年10月、過疎地域自立活性化優良事例表彰で、全国過疎地域自立促進連盟会長賞を受賞。

現在直面している課題

NPOの後継者づくり。

今後やってみたいこと

若者がもっと移住してほしい(現在は、移住者の4割くらい)。そして、ここで起業し、地元の人を雇ってくれるのが望み。そのバックアップはしていきたい。また、農地も余っているので使ってほしい。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 里山ぼらんていあに参加していた移住者、移住予定者に質問。「移住を決めた要因は？」

<答え>

●犬山市から3年間通い、やっと空き家を手に入れた人(来月からリフォーム開始)・・・若い頃から田舎暮らしに興味があった。3年前にネットで見つけて、空き家ツアーに参加。気に入ったのは「人」。ここにはしっかりしたNPOの活動がある。物件だけではやっていけない。助けたり、助けられたり。困ったら訪ねる場所があることが大事。

●第1期リフォーム塾生で住居を新築して移住した人・・・ここには実力者がいない。みんな同じようなレベルで生活し、「とりもって」(協力して)きた地域。それがいい。

●NPO事務局・端さん・・・2013年2月に森林整備講習会に参加。4月に移住を決めた。都市から近いわりに自然が濃い。駅も信号もコンビニもないけれどそれも魅力。ここに集う人たちが楽しそう。地域の皆さんがよそ者をよそ者にする人たちではない。

その他、伝えたいこと

●大島さんに、「他の閉鎖的な地域ではこのような活動はできない？」と聞いたところ、「できる」と即答。ポイントは、「地域の人に何をやっているか、まめに情報発信すること」。

●行政主導ではダメ。民間がやって行って行政がバックアップする体制がいい。

写真

「里山ぼらんていあ」の12月の活動場所は、リフォームした築150年以上の古民家の庭木の手入れ。お昼は、この家に移住した人が手打ちそばをごちそうしてくれた。みんなで和気あいあいと話が弾む。



第1期リフォーム塾で再生した「結の炭家」。交流施設として活用。リフォームのコンセプトは、昔の形に戻すこと。新建材は全部取り払い、柱だけにしてから始める。ここ松本部落では、5軒の空き家が埋まり、空き家ゼロの地域になった。

NPO法人 福寿の里自然倶楽部

調査団体名 : NPO法人 福寿の里自然倶楽部 団体代表者名 : 渡会三治
 設立年 : 2011(平成23)年4月 対応してくれた人の名前 : 渡会三治、横光八洲男
 団体URL : <http://fukuju-no-sato.com/>
 活動拠点 : 岐阜県恵那市上矢作町 調査員 : 近藤 朗、浜口美穂、安藤里恵
 取材日 : 2013年11月8日 レポート作成者 : 安藤里恵

活動内容

- ・過疎化と高齢化が進む上矢作町に少しでも活気を取り戻したいということで、NPO法人 福寿の里自然倶楽部を立ち上げた。信号もコンビニもない町だが、約10haの「アライダシ原生林」(正式名称:アライダシ自然観察教育林)をはじめ手付かずの自然だけはどこにも負けない。北の南限と南の北限の自然が融合した地域にあるアライダシ原生林は、他に類を見ない珍しい植生が見られる。霊峰大船山、その山腹にある大船神社はかつて信仰の山として村人の永遠の心のふるさとである。境内には樹齢2,500年とも言われる巨樹の弁慶杉があり、また近隣の標高1,000mある大船牧場では360度のパノラマが楽しめ、これらを巡るエコツアーを実施している。
- ・12月には間伐体験(人工林:ヒノキ・スギ)も行っている。

キャッチフレーズ

自然の宝庫上矢作 ～自然と遊ぶ 自然と学ぶ～

会のモットー(何を大切にしているか)

- ・上矢作や原生林を訪れた人々に心安らぐ感動を提供したい。取り組みを通して上矢作の自然の素晴らしさを少しでも知っていただけたらいいと思う。「また来たいな」という思いが生まれれば最高である。
- ・信号もコンビニもないが、手付かずの自然だけはあり、どこにも負けない誇りを持っている。

設立から現在に至るまで変化したこと

- ・設立から3年目になるが、多くの人たちが上矢作町を訪れてくれて、自然とふれあう中で自然の素晴らしさや大切さなどを感じていただいていることが一番うれしい。恵那市にこんな素晴らしい自然があるのかと皆さんびっくりして帰られる。だんだん知名度が上がってきたなと感じている。

連携している団体・専門家・自治体など

- ・恵那市役所ふるさと活力推進室、観光交流室、農業振興課、岐阜県恵那市農林事務所農業振興課、恵那市観光協会、上矢作まちづくり委員会、恵那市観光協会上矢作支部、上矢作道の駅ラフォーレ福寿の里、上矢作農産物加工所ふくちゃん工房、上矢作石川トマト農園

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

- ・自然体験活動プログラムを展開(エコツーリズム事業)／アライダシトレッキングツアー、大船山・松並木トレッキングツアー、子ども自然キャンプ、星空観察会など。
- ・町内観光地周辺環境保全事業／創造の森、大船山牧場遊歩道、モンゴル茶屋、矢作川源流の森・復興の森の草刈り・伐採など。
- ・間伐体験

現在直面している課題

- ・NPOを設立して3年目。手付かずの自然資源を案内するエコツーリズム事業(COOP岐阜が全面協力)を展開してきて、着実にツアー参加者は増加している(2011年:152名、2012年:315名、2013年:341名)が、まだまだ、プログラムの内容が一面的であったり、参加者の地域が岐阜県内外・美濃市など固定的である。地元の中学生は学校として来るが、それ以外に地元の人は訪れない。大きな広がりにはなっていない。広報、宣伝不足の感否めない。近隣の子どもたち以外にも、矢作川流域など広く活動・周知・交流できることが最大の望みである。

今後やってみたいこと

- ・宿泊をセットにした自然体験プログラムを取り入れたい。
- ・矢作川流域圏の上流と下流での交流を行いたい。
- ・愛知県三河地方の人々が参加できるような体制をつくりたい。
- ・大学生を連れてきて教育体験プログラムを行いたい。
- ・いろいろな団体とコラボできるツアーを組みたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

- ・情報＝三河地方の山村体験に関心のある団体。
- ・人脈＝専門的および教育的視点で中山間地域の地域づくりに対し協働で取り組める産学関係者。
- ・矢作川流域「圏」での交流をどんどん広げていきたい。

チームオリジナルの質問

<質問内容> ツアーガイドが伝えたいことは？

<答え> 原生林を通して、人の営みを伝えたい。何を学ぶか、何を知るか、知ったことをどう活かすかを重要視している。ただのガイドではなく、インタープリターとしての立場の確立が必要である。

その他、伝えたいこと

・略歴

1994(H6)年 恵那郡上矢作町と東濃森林組合の管理者が原生林を残す方向で動き出す。

2004(H16)年 まちづくり委員会が運営を行う。

2011(H23)年 NPO法人 福寿の里自然倶楽部が発足する。

・エコツーリズム日程・・・5月10日前後～11月後半まで

・以前は幡豆郡吉良町(現 西尾市)と上矢作町で交流があったが、合併により地域の特色が失われてしまった。

・上矢作町の高齢化率は現在40%。担い手は高齢化し、若者は都会や近隣の恵那市などに出ていってしまう。

・町内にある国民健康保険上矢作病院や老人ホーム福寿苑には、外から働きに来る人しかいない。

・大船山牧場には岐阜県内唯一の風力発電があるが、現在はほとんど稼働しておらず、エコツアーとして利用が危ぶまれる。

・豊田市や岡崎市など流域圏の子どもたちと交流をしたいという思いがとてもあった。まずは事例集づくりのメンバー全員で視察と交流を兼ねて、アライダシ原生林トレッキングツアーを5月に実施してもらう予定。

写真



←福寿の里事務所の入っている、奥矢作木センター玄関

↓事務所内にて(左から):横光八洲男さん、渡会三治さん、取材者(近藤、安藤)



↓玄関にて(左から):取材者(浜口、近藤)、渡会さん、横光さん



矢作川水系森林ボランティア協議会

調査団体名	： 矢作川水系森林ボランティア協議会	団体代表者名	： 丹羽健司
設立年	： 2004年1月	対応してくれた人の名前	： 丹羽健司
団体URL	： http://www.yamorikyuu.com/	調査員	： 後藤伸也、蜂須賀 功
活動拠点	： 矢作川流域	レポート作成者	： 蜂須賀 功
取材日	： 2014年1月30日		

活動内容

矢作川水系森林ボランティア協議会（以下、「矢森協」という）は、現在14の森林ボランティアグループから構成されており、約250人が所属している。主に、森の健康診断と協働間伐モデル林事業の2つの事業を行っている。

●森の健康診断

2005年から毎年6月第1土曜日に開催している。流域の人工林の現状を市民の五感と科学で明らかにしようと、これまで豊田市、根羽村、恵那市、平谷村、設楽町、岡崎市などで9回行われ、延べ約2,000名の参加者があり、調査も2巡目に入っている。森林ボランティアをリーダーに地元サポーター、自然観察サポーター、一般参加者を合わせて1班8人程度で編成し、植生調査と混み具合調査を合わせて50数項目の調査をマニュアルに従って調査する。現地では、調査後、林分の診断と処方全員で討議し、全体では秋に報告会を開催し、研究者によって集計分析された結果を参加者で共有している。2014年度で10回目を迎え、森の健康診断は終了する。

●協働間伐モデル林事業

豊田市山間部の幹線道路沿いの森林をモデルとして、山主と矢森協で林分調査を行い、森林インストラクターによる講習の後、山主と一緒に間伐を行う事業。年間8ha行っている。山主たちは、森林ボランティア（矢森協）から楽しさを、森林インストラクターから確かな技術を学び、山主たちの山仕事に対する意識が変わりつつある。

<設立までの経緯>

2000年9月の東海豪雨は想像を超える豪雨であり、あと30分続けば豊田市内は水没していたかもしれない。矢作ダムの一面を覆い尽くす流木、「沢抜け」と呼ばれる土砂崩落などにより、山がいかにかぼつたらかしであるかを代表の丹羽氏は感じた。そこで、山の現状を調べるために、山主1,000戸にアンケートを行ったところ、山主は自分の山の現状を全く知らない、素人であることがわかった。同時に丹羽氏は、足助きこり塾で森林ボランティアを始め、その過程で、伊那市の森林塾で島崎メソッドに出会い、山仕事の楽しさを伝える精神と確立されたメソッドに感銘を受ける。その後、島崎メソッドの森林塾を豊田市に誘致し、森林ボランティアの育成をしながら、その受講生の活動の場として、足助きこり塾が中核となって、矢森協を設立した。

キャッチフレーズ

山と都会に幅広い森の応援団づくり

会のモットー（何を大切にしているか）

「森林ボランティア、無償奉仕から交流学习へ」

無関心な山主に科学的で愉快的な山仕事を伝えること、広範な都市住民に森林と山村の実態を知らせること、プロの林業者に持続可能な林業を行えるよう応援することを目指す。

設立から現在に至るまでに変化したこと

矢森協の設立後、毎年、森の健康診断や間伐モデル事業を行ってきたが、森の健康診断事業も落ち着き、「成熟した時期」を迎えている。

また、組織が大きくなってきたための悩みかもしれないが、矢森協の理念の浸透が希薄になってきた気がする。「チェーンソー暴走族」にならないよう、矢森協の歴史、流れを皆に伝えていきたい。

現在直面している課題

最近、森林ボランティアの作業中の事故がよく報告されている。矢森協でも、いつ起きてもおかしくないと認識しており、安全対策は重要な課題である。活動が広がれば広がるほど、事故の起こる可能性は高くなる。事故を防ぐにはどうすればよいか、矢森協内部で徹底的に議論した。その結果、事故を防ぐ特効薬はないが、従事者がお互いに見守りあい、自分の弱さを見せることを恐れず、すなわち「弱さの情報公開」をすることが重要だとわかった。迷った時は遠慮なく、仲間に聞く人間関係づくり、言いあえる関係をもつことが大切である。

今後やってみたいこと

森の健康診断が来年度で10年を迎え、終了するが、今後は、現在も行っている森の健康診断の全国出前授業をもっとやっていくことになるのではないかと考えている。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

全国で森の健康診断を始めようとする団体に、現地に出かけてリーダーの養成から運営までのノウハウを教えるため、人材、費用の確保が必要になる。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 行政とどのように関わっていますか。また、補助金などの支援を受けていますか。

<答え> 行政(豊田市)からは、金銭的にほとんど助成を受けていない。各グループや会員からも、カンパはいただいているが、会費として強制的な徴収はしていない。その点が自立しており、民主的な運営で、最適なスタンスだと思っている。

また、会員はとよた森林学校の卒業生を対象としており、卒業後はその先輩が面倒を見る形で、森林ボランティアとして育成している。矢森協としては、ある程度能力を持った人で、きちんとした団体しか受け入れない。そのため、メンバーは非常に自主的で、細かな指示をしなくてもみんな動けるところがすごい。

その他、伝えたいこと

○私たちの仕事は、家庭教師。

山主にプロのように教えることはできないが、学生家庭教師のように、科学的に山仕事を学び、気づく楽しさを教えることはできる。

○私たちの仕事は、触媒。

都会住民に対し山の大切さを語り、素人山主に対しラブコールを送り、山仕事のプロに対し自信を持ってと励ます、3者間の「触媒」となっている。

写真



森の健康診断の様子



協働間伐モデル林にて

とよた森林学校

調査団体名	: とよた森林学校	団体代表者名	: 北岡明彦
設立年	: 2010(平成22)年	対応してくれた人の名前	: 北岡明彦
団体URL	: http://woodytoyota.net/gakkou/0_index.html		
活動拠点	: 愛知県豊田市森林課	調査員	: 沖 章枝、松井賢子、長澤壮平
取材日	: 2013年11月21日	レポート作成者	: 長澤壮平

活動内容

1. 人工林の間伐ができる人材の育成。
 2. 今までに森林や林業に関心がなかった森林所有者に森林や林業の基礎知識を解説する。
 3. 森林・林業の理解者などの「森の応援団」を増やす。
- 以上の目的のために年間14の講座を開いている。大きく分けて、「人材育成コース」と「森の応援団コース」の2コースがある。前者は本格的に人材を育成するコース、後者は市民が気軽に参加し、森林への理解を深めるコースになっている。特に「森の応援団コース」は人気が高く、抽選となる講座もある。

キャッチフレーズ

行政の英断

会のモットー(何を大切にしているか)

大事なものは、人づくり。もう一つは、一般市民への啓蒙普及。
豊田市の“森づくり”という基幹があって、これを支援するため、そして実現するためにはどうしたらいいかということコンセプトとしている。継続こそ力なり。

設立までの経緯

1996(平成8)年に山里足助森林協力隊が誕生したのに続き、元信州大学教授島崎洋路先生(とよた森林学校長)が講師を務めた講習会の受講生によって、森林ボランティアグループが市内各地に結成された。各グループは徐々に交流を深めていき、「みんなで森林から学び、森林を知り、森林のためにそれぞれの立場で努力しよう」と、2004(平成16)年1月に『矢作川水系ボランティア協議会(矢森協)』を結成した。現在も「森の健康診断」や「間伐モデル林事業」等々の企画、運営を行っている。都市と農山村の交流を進めるNPOも誕生した。こうした先駆的運動があって、豊田市に『とよた森林学校』が設立された。
(『矢作川流域 森林物語』発行豊田市 から抜粋)

連携している団体・専門家・自治体など

とよた森林学校OB会、とよた都市農山村交流ネットワーク
講座の抽選に外れた人の受け入れや講座修了者のレベルアップなど、広範な活動によって広報・啓もう活動をしていただいている。どう考えてどうお願いしたいか全てわかって協力いただいている。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

先に掲げた、講座の実施が具体的な活動。これまでの成果はまだ見えない。例えば豊田市民は41万いる。8年やってきたこの講座の参加者は、1,000人とか2,000人の単位。豊田市民では1,000人いないだろう。少なすぎる。できれば最低1割(4万人)まで来てほしい。ただ、あまり門戸を広げすぎてイベント型にする気持ちはない。
豊田市には緊急に間伐しなくてはならない森林が20,000haある。森林組合は年間1,400ha間伐している。そういう中で、ボランティアがやる面積は5haだが、都市住民も森づくりに参加するという、それ自体に意味があると思う。

現在直面している課題

セミプロ養成講座は、今の林業の実情からして難しい面がある。講座を終えて実際に林業に携わる人は2割ほど。せっかく講座をやっても林業が厳しい状況なので、なかなか業として成り立たせるところまでいけないというのが大きな課題。

今後やってみたいこと

自分の持っている山をどういうふうにしたらよいか。それを森林所有者の立場で考えれば、「自分が気持ちのいい山だ」と思えること。自分が、あるいは家族、子ども、孫、ひ孫に、わしがつくった山はこういう山だと誇れるような山をつくってほしい。ひとつのパターンとして、針広混交林がある。ヘクタールあたり数十本は、とてもいい杉や檜が残っている。隣を見ると、シラカシのいい木がある。で、林床にはちょっと草花も咲く。そんな森はどうかと提案している。それが豊田市の森づくりだろうと思う。それは林業生産している多くの人の考え方とは違うかもしれない。けれど林業生産をしている人でも、必ずしも人工林一辺倒がいいとは思っていない。どうしたらいいのかわからずにいる人の方がはるかに多いと思う。いろいろな考え方を多くの人に話して、自分で選んでもらう。最後は自分で選ぶことが一番大事なことから。そういういろいろな話をする機会をつくるのが、行政としては大事なことではないかと思う。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 良い森とはどんな森ですか？

<答え> 豊田市に限れば、豊かな動植物のいる森。生物の集合としての、まさに生態系としての森林。目指す豊田の森というのはそういう森ではないか。林業一辺倒ではなく、公益的機能も得られる森林。豊田市の場合、自家林業では生計は成り立たない。そこを基本にすると間違えてしまう。

<質問> 写真を見ると楽しそうですね。

<答え> 僕が楽しまない参加者は絶対楽しくないですから。まず僕が楽しむようにしている。だから楽しいと思うことしかやらない。それから、子どもたちが喜んでくれるのがやっぱり一番楽しい。本当に楽しい。

その他、伝えたいこと

1人でも多く市民の方に参加していただきたい。「自分はわかっている」という人ほど来ない。でも、そういう人にこそ来てほしいと思っている。

写真



とよた森林学校OB会

調査団体名 : とよた森林学校OB会
 設立年 : 2010(平成22)年
 団体URL : http://www.woodytoyota.net/gakkou/0_index.html
 活動拠点 : 愛知県豊田市および広域
 取材日 : 2013年11月21日

団体代表者名 : 山本薫久
 対応してくれた人の名前 : 山本薫久、高部ほなみ
 調査員 : 沖 章枝、松井賢子、長澤壮平
 レポート作成者 : 長澤壮平

活動内容

『とよた森林学校』の修了生たちが任意に集まり、OB会として組織化した。幹事は、山主から2人、観察リーダーから2人、森林ボランティアから2人、その他から2人を選んで、多様な人に担ってもらうようにしている。

- 自然観察会:リピーターの受け皿として、そして森林学校ではカバーできない地域外のフィールドなどで、自然観察会を行っている。また、「樹木観察会」は、この地域の樹木を学習する趣旨で開講している。
- 間伐モニタリング調査:間伐ボランティアが施業した場所の間伐前、間伐後の推移を調査している。
- 間伐技術ステップアップ講座:森林ボランティアの技術向上のための講座を行っている。
- 木工教室:間伐材でベンチを作っている。

キャッチフレーズ

手弁当で応援する豊田の森づくり

会のモットー(何を大切にしているか)

受講者が自分で何かやっというときの一つの手がかりになればという思いでやっている。

設立から現在に至るまで変化したこと

最初は70人くらいだったが、会員が徐々に増えてきている。現在は概ね150人くらいで推移している。

連携している団体・専門家・自治体など

とよた森林学校とは常に連携を保っている。

現在直面している課題

山主に間伐技術ステップアップ講座を受けてほしい。間伐ボランティアはあらかじめつながりがあるのでいろいろと情報が回るが、山主には森林学校の講座を受けた後のフォローがないので、そこが課題でもある。

今後やってみたいこと

子持ちのお母さんたちは、自然観察会などには参加しにくい状況。そこで、歩けるくらいの子であれば、同伴で参加できるような親子の自然観察会をやりたい。これができるのはOB会じゃないかと思っている。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

保母の資格をもっている人などに、お願いできるかもしれないと思っている。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 運営を自立的にやるうえでの経済的な苦勞は？

<答え> メインの講師もほとんどボランティアで来ていただいており、会報の発送もとよた森林学校に同封していただいているので、経済的にはあまり問題ない。

その他、伝えたいこと

交流会を開くなど、外部と広く交流していきたい。

写真



OB会の活動風景

とよた都市農山村交流ネットワーク

調査団体名	: とよた都市農山村交流ネットワーク	団体代表者名	: 山本薫久
設立年	: 2008(平成20)年12月10日	対応してくれた人の名前	: 山本薫久
団体URL	: http://www.toyotasanson.net/		
活動拠点	: 愛知県豊田市の農山村	調査員	: 沖 章枝、松井賢子、長澤壮平
取材日	: 2013年10月29日	レポート作成者	: 長澤壮平

活動内容

活動の目的は、都市と農山村が交流する場をつくることによって、都市部の人たちに農山村の魅力を伝えるとともに農山村を活性化すること。足助、旭、稲武、下山、小原、松平など豊田市の農山村域でさまざまな交流事業をしてきた。旧町村ごとに地域会(6地域会)を組織し、幹事が集まり毎月打ち合わせを行っている。農都交流の取り組み、都市と農山村のネットワークを構築し推進する組織が、とよた都市農山村交流ネットワーク。

もっとも力を入れている活動は「セカンドスクール事業」。ひとつは、豊田市内の希望する小学校が行事として2泊3日の農山村体験をするというもの。小学生3人から4人で1軒の農家に泊まり、3日間は田舎の子になる。野菜が大好きになったり、食事作りや後片付けが当たり前になったり、保護者がびっくりするほど子どもたちによい影響を与えている。もうひとつは、希望する小学生が2泊3日や1泊2日で農山村体験できるフリー版を実施している。毎回希望者が殺到し、事業の拡大を目指している。2013年度は約250人の小学生が参加した。

その他、広く大人を対象に行っている事業として、農業体験、山里の料理・道具などを手作りする山里の知恵を学ぶ講座、森林の恵みを体験する講座など、多彩な講座を開き、都市の人々が農山村に触れる機会を提供している。

キャッチフレーズ

農山村の教育力

会のモットー(何を大切にしているか)

私たちの子や孫たちが 住み続けたいと思う 帰りたいと思う そのような「山里」にしたい
訪れる人が また来てみたいと思う 住んでみたいと思う そのような「山里」にしたい
そのような「山里」の 山・川・里で
自然にふれ 山仕事をして 野良仕事をして 人と交わることが 幸せだと思
そんな輪(ネットワーク)を広げたい

連携している団体・専門家・自治体など

2010年3月、農山村で活動するさまざまな団体やグループと「農山村へのシフト千年委員会」を立ち上げて、毎月、会合を開催している。それらの団体と共に実行委員会をつくって、農山村地域で「あすけ夢里まつり」「ほんわか里山交流まつり」、豊田の市街地のど真ん中で「いなかとまちの文化祭」を開催している。延べ数千人の参加を得ている。これらの取り組みによって、多くの市民に暮らしの原点である農山村の自然、営み、文化に注目をしていただいている。その動きの中で、今年度、豊田市は『おいでん・さんそんセンター』を設立した。このセンターは市の組織として、都市農山村交流を進めようとするもので、とよた都市農山村交流ネットワークと目的や事業内容がほとんど一致している。このため、高度な協力体制が可能になり、農山村交流の取り組みは今後ますます活発になると予想される。セカンドスクールでは豊田市教育委員会の協力を得ていて、未来の山村を担う次世代教育となっている。

現在直面している課題

地域ごとに特色があり、セカンドスクールのやり方も地域ごとに全く異なるため、一律の活動にせず、そうした地域ごとの特色を活かすよう気を配っている。

今後やってみたいこと

セカンドスクールの受け入れ態勢を充実させ、さらに拡張していきたい。また、『おいでん・さんそんセンター』やさまざまな団体と協力共同をさらに進め、取り組みを充実させていきたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

活動は豊田市と連携しているが、縦割りではいけないと思っている。例えば、産業部の農政課がやってるからグリーンツーリズムだ、地域づくりだから社会部だ、持続可能な社会といえば企画だというのではなく、それら全てを総合するような取り組みとしてやっていきたい。

チームオリジナルの質問

<質問内容>若い人や地域の人たちとの結びつきをどうやってつくってきたのか。

<答え>地域で本当に意欲がある人とは、結びつきやすい。田舎に住んでいても、どうでもいいという人たちとは難しい。それから、自分の世代しか考えてない人も難しい。子や孫とか、先々のことを考えてない人たちは、今の生活に満足しているので、新しいアクションはいらないと考えている。しかし、旭地域の人たちは子や孫の時代がどのようになるか見ているし見えているので、活動に意欲的。そういう人たちと一緒にやっていける。

その他、伝えたいこと

いろいろなところで皆さんがもうやっておられるので、一緒になってやれば良いと思う。豊田市で完結するのではなく、根羽とか設楽とか恵那とかと結びつのが大事。この地域は山も海も都会も近いので、やりやすいと思う。流域圏全体が結びついて一緒にやっていきたい。

写真



セカンドスクールの様子

豊森なりわい塾

調査団体名 : 豊森実行委員会
 設立年 : 2009年5月
 団体URL : <http://www.toyomori.org/>
 取材日 : 2013年1月19日

団体代表者名 : 澁澤寿一
 対応してくれた人の名前 : 中川恵子
 調査員 : 太田 司、丹羽健司
 レポート作成者 : 太田 司

活動内容

「余計な予備知識を一切入れずに取材をしてこい」と共同取材者から命を受け、筆者は豊森なりわい塾（通称「とよもり」。以下、豊森と記載）が何であるかを知らないまま取材地へと向かった。そして実際に「豊森とは何か？」ということが今回の取材ないし雑談の中心話題となった。取材対応者の中川氏によれば、豊森の活動が何であるかは単に断言しにくく、あえて言うならば、豊森的な幸福論を共有し追求する場であるという。塾内において「豊森的」という合言葉を共有しつつも、「豊森的」とはどういう状態であるかを自問し、塾生と塾自体が共に成長している様子が伺えた。

豊森は豊田市、トヨタ自動車株式会社、NPO法人 地域の未来・志援センターの三者の協働で行っているプロジェクトである。森林および里山を学びの場とし、人と地域づくりを考え、それらを活用する仕組みづくりと担い手を創出していく活動を行っている。塾生には都市部や里山地域から、学生やトヨタ自動車の社員など、老若男女が集っている。2009年から5年目の活動で、今期が3期目となる。

塾生たちは各講座で、地域コミュニティーの暮らしや経済など、特に森林と共に生活する里山の問題点などを学び、議論を深める。さらには、実践的なアイデアを持ち寄り、住民たちと共に里山の生活に活用するような取り組みまでも行う。過去の塾生の中には、ただ学ぶだけでなく、実際に里山での生活を選択し、移住を決意した者も少なくない。

このような議論の中で形成されるのが、彼らが口にする豊森的な活動である。豊森的な活動とは、さまざまなフィールドの人間たちが、それぞれの思いで、森林と里山について語り合い、実践に移していくことであるのだろう。まるでさまざまな色の絵の具で描かれた、一つの里山の風景が目浮かぶようである。そこには森と里を生業とする人間たちが生き生きと存在している。

会のモットー

地域を知り、地域に入る。まちとむらをつなぐ仕組みをつくる。自然に根ざして暮らし・しごとを創る。現代の百姓を目指す。

設立から現在に至るまで変化したこと

豊田市の農山村に関りながら、継続的に豊森を実施していく中で、多くの人たちが仲間とつながり、地域を見つめ直し、自分を見つめ直して、実践の伴う新しい価値観を持った人材が輩出されている。塾生の中から実際に山里に移り住んで、地域の針葉樹を活用した家具づくりの工房を立ち上げたり、ふるさとにUターンして事業をスタートさせるなど、地域に根ざした暮らしや事業を始める人や、農山村に関りながら新たな生き方を選択する人たちも現れた。

連携している団体・専門家・自治体など

とよた森林学校、おいでん・さんそんセンター、夕立山森林塾、地域再生機構など

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動

カリキュラムの中でフィールドワークを実施し、地域の人々から知恵を学ぶ。また、地域住民と共に活動することで、共に山村を再生する方法を模索していく。塾生たちは豊森で学んだことを、それぞれの意図と方法で日々の生活や仕事に活かしていく。実際に山村に移り住むことを選択する者や、自主的に交流や農的な活動を行うものも数多くいる。

現在直面している課題

豊森での活動を広く知ってもらい、継続的な運営のための塾生を確保すること。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 豊森は何を目指しているのか。

<答え> 豊森が目指していることは、塾生が自ら考え行動していくことである。各塾生が当塾に来る動機は実にさまざま。「豊森なりわい塾」で学んだことをベースに、塾生たちがそれぞれの目指すものを実践していけば良いと考えている。シアワセな社会とは何か、これからの社会のカチをみんなで模索する、そのプロセスが豊森的なあり方。

その他伝えたいこと

筆者が取材に訪れた際に講座が丁度開催されていた。豊田市足助の会館の一室では30人以上の人々が、山村の問題点と再生へのプランを熱心に議論していた。和気あいあいと話す彼らを見て、筆者は山村の問題点の解決方法への実に単純かつ最も重要なヒントを学んだような気がした。山村にこのような話し合いの場所が少ないこと自体が問題だったのではないだろうか。大勢が村のことを真剣に考え、自由にものが言える場所があり、そこには他所からの意見も加わり、いつも新鮮な話題であふれているナマの議論が行われる場所があまりにも存在しないのではないかと。そして同時に筆者は悲しさを感じた。それはそこに村人の実態との大きな隔たりがあり、この単純な解決方法が実践できない事実についてのやるせなさを感じたからである。しかしながら、種をまく人間がいなければ、もちろん収穫はない。ここ豊森には、それぞれの塾生がそれぞれ自分らしい希望の種をまこうとしている、何とも言えない心地よさがあった。

写真



株式会社 M-easy

調査団体名	: 株式会社 M-easy	団体代表者名	: 戸田友介
設立年	: 2003年	対応してくれた人の名前	: 戸田友介
団体URL	: http://www.m-easy.co.jp/		
活動拠点	: 愛知県豊田市太田町蟹田6番地 福蔵寺内	調査員	: 眞木宏哉、浜口美穂
取材日	: 2013年11月27日	レポート作成者	: 浜口美穂

活動内容

●活動の経緯

戸田さんが名古屋大学の学生だった当時、大学、学生、経営者の有志が集まってこれからの社会のあり方について議論する「ひと循環型社会支援機構」に参加。これをきっかけに、「これから農業がどんどん衰退していき、自分たちの時代は、安心して食べられるものがなくなってしまうかもしれない！」と思い立ち、若者による農業をベースにした未来づくりをすることを掲げて、同機構の支援も受け、学生を中心に同社を設立した。

2006年から常滑で有機無農薬野菜の生産を開始。縁あって地域のおばちゃんたちの自家用野菜も一緒に名古屋市内を中心にひき売りを行うようになり、2008年に「やさい安心くらぶ」を立ち上げた。これらの事業は2013年10月末に同社から独立。

2009年9月～2011年3月末まで、豊田市旧旭町で「日本再発進！若者よ田舎をめざそうプロジェクト」(若者PJ)を豊田市、東京大学と連携して実施。10名の若者が旭地区に移り住み、安心安全な農業を中心に山里の暮らしを体験。さまざまな価値観の相違などの困難を経て、山里の豊かな自然環境、豊かな人間関係、豊かな暮らしなど「ここには価値あるものがあって、それを表現することが、自分たちの暮らしにつながる」ことに気づいた。

結果、7人が独立して移住。現在は、時につながりながら、福蔵寺の境内でご縁市を開いたり、米や大豆や餅や綿をみんなでつくる「まるっこくらぶ～みんなでつくってみんなでわける野良仕事～」などを実施している。また、都市の人・団体などを受け入れ、山里の体験を提供する講座も実施。2013年3月には「生きるを考える講座」を行った。

キャッチフレーズ

地域に根ざした、はたらきかた・くらしかた・いきかた

会のモットー(何を大切にしているか)

地域で生きていくこと。

生き方、暮らし方を問い続けながら、ライフステージに合わせた活動を行っていく。

設立から現在に至るまで変化したこと

当初はどう稼ぐかということばかり考えていたが、スタッフや地域のじいちゃん・ばあちゃんから、どう暮らしていくかということが一番大切なんだと学んだ。

その後、田舎と街をつなげる中間の役割を担うことを考えて実行しようとしたが、地域のことができないことに気づいた。街に4分の1くらいいるパートナーが必要。同社のスタッフを増やすのではなく、その時々でつながりながら一緒にやれるパートナーをつくっていきたい。田舎体験の企画のときには、地域の人に手伝ってもらうこともある。法人としては小さく、でも、さまざまな人とつながりながら、活動は大きくなっていくことが理想。

連携している団体・専門家・自治体など

旭地区のさまざまな地縁組織や団体、豊田市のさまざまなまちづくり団体、旭木の駅実行委員会(事務局)、とよた都市農山村交流ネットワーク(監事)、東京大学 牧野篤教授、名古屋大学 高野雅夫准教授、NPO法人 樹木環境ネットワーク協会 洪澤寿一氏など多数。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

(同社と個人の動きは明確に分けていないことを前提に)

2013年4月に、豊田市の地域会議制度を利用し「あさひ若者会」を結成(事務局は旭支所)。

●背景:お年寄りと若者の間には気持ちの隔たりや遠慮があるが、若者を巻き込んでいかないと地域づくりはできない。若者も地域のことを真剣に考え、何かやりたいと思っている。

●具体的取り組み:渋澤寿一氏を招いて講演会、年配者を案内人に村歩き、ワークショップ(何十年か後の旭がどうなっているか、何がしたいかを出し合う)など。

●戸田さんの感想:地域の若者たちは、「持続可能な社会」という言葉は使わなくても、そのことが腹に落ちているように感じた。

●若者たちが起こした変化:築羽(つくば)自治区で、笛の吹き手がいなかったから郷社の祭りをやめようという話がお年寄りの中から出たが、若者たちは「いないなら、笛の練習をしよう」と練習会を開き、祭りは継続された。

●今後の可能性:若者会で「ターン」を呼び込むことができるように。また、「ターン」で入ってきた人と若い衆同士のつながりができるように。

現在直面している課題

課題があるから楽しい。何かやるときに、多様な人がつながって一緒にやればいい。お寺が本来、住職だけのものではなく、檀家のためや地域の人のために存在するように、同社もその感覚でやれるといいと思っている。

今後やってみたいこと

子どもができてから「教育費はどうするの?」とよく聞かれるが、教育まで外注するのかなと思う。教育費のためにお金を稼ぐなら、その時間をいろいろなことを体験させたり、親の働く姿を見せたりする時間に充てたい。地域が学校になるような、地域の人々が先生になるような仕掛けをつくりたい。

地域の中では、自分のライフステージと合わせてさまざまなことを変化させてやっていけば、自分が納得できる仕事ができる。今は小さな子どもたちが集う企画など。山里では死ぬまでやることがあると思う。

チームオリジナルの質問

<質問内容>若者PJの他にも、豊森なりわい塾、とよた都市農山村交流ネットワーク、旭木の駅プロジェクト、千年持続学校など、さまざまなプロジェクトが旭地区に集中する理由は何?

<答え>

○豊田市の中でも高齢化率は41%と、一番高い分、危機感がある。

○旭地区は財産区や観光資源など、経済的基盤が弱い。国道もない。他の地域に比べて何も無い分、お金とは関係ないコミュニティが残っている。観光にも毒されず、人がいい。都会の人をつなげるにも、ここなら今までの観光のあり方とは違う、濃密に人と関わりながら気づきを得る新たな観光ができるのではないかな。

○地域をなんとかしたいという数人のキーマンが動いてきたことと、外部からのプロジェクトの刺激がいいご縁で重なりあって、人が人を呼ぶ動きになってきたということだと思う。捨てずにあきらめずに地道に行動し続ければ、いつかかたちになる。

その他、伝えたいこと

○「ターン」で来る人に

一番大切なのは、自分が自分なりに生きていくこと。悩んでいる過程もとても大事。稼ぎに意識がいきがちだが、自分なりの暮らしをつくることを意識して役割を担い、その延長に稼ぎ仕事があると考え、心を平穏に保ちながら住み続けることができると思う。孤立しがちなので、お祭りやお役に積極的に出て、その場を楽しんで!

写真



同社の事務所になっている福蔵寺にて。写真右の右側が戸田さん



ピザ窯が地域のイベントなどで活躍



戸田さん宅で薪割り実演

旭木の駅プロジェクト

調査団体名	旭木の駅プロジェクト(実行委員会)	団体代表者名	高山治朗
設立年	2011年	対応してくれた人の名前	高山治朗
団体URL	http://kinoeki.org/ (木の駅プロジェクト ポータルサイト)		
活動拠点	愛知県豊田市旭地区	調査員	眞木宏哉、浜口美穂
取材日	2013年11月27日	レポート作成者	浜口美穂

活動内容

「木の駅プロジェクト」は、伐り置き間伐により山に放置されている材を山から出し、土場まで運べば、1トン(軽トラ約2杯分)で6,000円相当の地域通貨「モリ券」が対価として得られるという仕組み。2009年に岐阜県恵那市で始まり、現在、全国で約40カ所に広がっている。旭地区は2011年3月、全国で3番目にまずは社会実験として取り組みを始めた。

●背景

2005年に矢作川流域圏の町村を合併した豊田市は、2007年に豊田市森づくり条例を制定し、森林所有者と市、森林組合が一体となって間伐する「森づくりの団地化戦略」を進めている。また、市民側でも「森の健康診断」に取り組むなどの動きがあり、その流れの中で、木の駅プロジェクトが立ち上がった。

●プロジェクトの流れ「旭木の駅プロジェクト」の流れを紹介しよう。

- ①出荷したい人はまず実行委員会に登録する。
- ②放置材あるいは間伐した木を山から搬出し、土場に持ち込む。出荷樹種は柿の木以外は何でもOK。長さ50～210cmまで、末口直径5cm以上。
- ③土場には登録者の札が立っていて、その前に積む。
- ④自分で出荷材の長さ末口直径を計測し、事務局に申告。(第1～4回までは体積×比重0.8で重量を出していたが、第5回は比重0.75で計算)
- ⑤事務局から、1トンあたり6,000円相当の地域通貨「モリ券」(1モリ=1,000円)が発行される。
- ⑥モリ券は地元の登録店のみで使える。登録店は、飲み屋、温泉、食料品店、床屋、森林組合、ガソリンスタンド、コンビニなど多種多様。
- ⑦出荷材は、名古屋港木材倉庫(株)が1トン3,000円で買い取り、チップに製品化される。

●これまでの結果

第1回(2011年3月)、第2回(2011年11月～12月)、第3回(2012年2月～3月)、第4回(2013年11月～2014年3月)、現在、第5回目(2013年11月～2014年3月)実施中。3回目に、森づくり団地(豊田市施策)の伐り置き材の出荷などにより、出荷量が飛躍的に増え、第4回の出荷量は350トンに及んだ。出荷者数は53人、登録商店数は34店舗。

キャッチフレーズ

軽トラとチェーンソーで晩酌を

会のモットー(何を大切にしているか)

「継続こそ力なり」～そのポイント～

- ・山林保全活動の必要性はわかっているが、考えだけでは動かない。経済的な要素を取り入れることで継続性のある動きになる。
- ・間伐からモリ券交換、流通の仕組みが簡単で受け入れられやすい。年配の人でも参加しやすい。
- ・買い取り価格とモリ券発行の差額3,000円を寄付金、志材(モリ券に交換しない寄付材)、市の地域提案事業負担金で賄っている。市が実行委員会に参加し、負担金を出すようになったのは第4回目から。2012年度は1トンあたり逆ザヤ分の9割(2,700円)を200トンまで補填するように負担金をもらい、2013年度は300トンで8割、2014年度は300トンで7割(3年限定)と、変化している。関わるみんなが自分たちでやろうという気になることを最重要と考えている。市からも出荷された材の分だけ補填してもらおう形で、縛られないようにやっている。
- ・しっかりした事務局体制をつくる。モリ券の5%を事務処理費に回し、そのうち2%を登録商店が負担している。
- ・出荷量は自己申告に基づくため、顔が見える範囲でしかやれない仕組み。

設立から現在に至るまで変化したこと

第5回からの変更

- ・「土場利用会」をつくり、出荷者自らが土場の準備・片付け・運用を行っている。
 - ・商店が主体となって登録商店カタログができた。
 - ・モリ券1,000円券に加え、新たに500円券を発行。使いやすくなった。
- その他にも細かい変更事項あり。出荷者も商店もみんなが少しずつ工夫をし始めた。「少しずつ、少しずつ」が大事。

連携している団体・専門家・自治体など

豊田市旭支所、豊田森林組合、矢作川水系森林ボランティア協議会、森林ボランティアグループ、数名の研究者

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

山林の健全化、地域通貨による商店の活性化など、システム自体が山村再生の取り組みそのもの。出荷者に対して、安全講習も行っている。

現在直面している課題

- ・現在、5回目までマンネリ化しつつある。新たなモチベーションが必要。
- ・逆ザヤ分を埋める付加価値の高い販路、販路の多様化が必要。

今後やってみたいこと

新たなモチベーションとして、事業者が加わるとよいと思っている。例えば、建設会社や薪の会社など。

チームオリジナルの質問

<質問内容>プロジェクトに対する住民の反応は？

<答え>最初は、みな半信半疑。旭支所と森林組合の後援があったため、説明会にはとりあえず参加し、よくわからないが、とにかくやってみようかという感じ。80代の方はそんなことやっても・・・という反応だった。しかし、モリ券を手にし、例えば、刺身は外の地域のスーパーで買っていた人が、地元の店で初めて買って美味しさを感じるなど、地元店の魅力再発見につながり、モチベーションも上がった。また、第3回目くらいから、個人の山主が出荷するだけでなく、お宮や公会堂周辺を集落の衆が協力して出荷し、夏休みに子や孫を呼ぶ会を開催したり、祭りの余興資金にしたりする活動にも広がっている。

写真



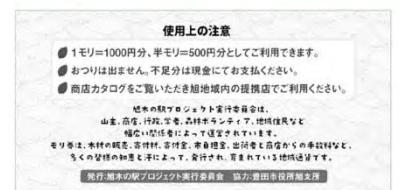
↑↓2011年3月の出陣式



↑土場は4カ所ある



↑熱い思いを語る高山さん



↑モリ券

千年持続学校

調査団体名 : 千年持続学校
 設立年 : 2011年
 団体URL : <http://sustaina1000.cocolog-nifty.com/blog/>
 活動拠点 : 愛知県豊田市旭地区
 取材日 : 2014年2月15日

団体代表者名 : 高野雅夫
 対応してくれた人の名前 : 高野雅夫
 調査員 : 太田 司、丹羽健司
 レポート作成者 : 太田 司

活動内容

田舎への移住には4つのカベがあると考えている。①住むところがない②生業がない③医療機関がない④高校、大学などの高等教育機関がない。これらのカベに取り組み、若い人の移住を応援しようと、生まれたのが千年持続学校。まずは①、空き家探しは借り手と貸し手のイメージがなかなか折り合わない。それならいっそ造ってしまおうとなった。受講料5万円×30名＝150万円が建築資金（現代版の＜講＞）。受講生は自然エネルギーや大工技術を学びながら力を出し合い、家をつくる（現代版の＜結＞）。完成予定の家の住み手は、地元の方々話し合いの上、移住を希望する受講生の中から決定した。

キャッチフレーズ

自然(じねん)なマネージメント

会のモットー(何を大切にしているか)

さまざまな人が集まり学び合うことから、地元の人、その子ども、I・Uターン者、都市の人、それぞれの学びたいことや、生活に密着した衣、食、住に関わることを専門的に学べる場となってゆくことを目指している。田舎暮らしを目指す人たちに、家をつくるという行為を通じて、田舎暮らしにはどうしても必要な、助け合い、共に生きる 現代版「結いと講」の生活術と心を伝えていきたい。

設立から現在に至るまで変化したこと

2011年9月に開講してから毎月最終土日に講座を行い、その他に自主作業も行っている。つぶれた小屋の撤去作業から始まり、近くの山で木材を伐り出し、伝統軸組み工法の大工仕事で木材を加工して、2013年6月30日に上棟式を行った。この間に、待ちきれず受講生の中から4家族10人が旭・足助地区へ移住した。30歳代を中心に20歳代も多く、意外と50～60歳代は少ない。河合棟梁の伝統工法を伝えたいと思いと本物を学びたいという受講生の意欲が反応し、技術は非常に向上したものの、計画の2倍近い時間がかかっている。一方、定例会や自主開催ワークショップには子どもたちも集まり、家づくりに励む大人の姿を見ながら子どもたちが勝手に遊ぶ、懐かしく微笑ましい光景が出現している。設立当初は専従事務局を置いたが、半年過ぎから定例開催日にホームルームとして全員で協議して運営する方式に変更した。

連携している団体・専門家・自治体など

とよた都市農山村交流ネットワーク、おいでん・さんそんセンター、足助きこり塾

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

山を見、木を伐り、製材することから、地元と協調しての上棟式や、耕作放棄地の活用や、農産加工に至るまで、モノとワザと文化での地域の宝物探しが始まっている。また、家づくりだけでなく、藤村氏を迎えての3万円小仕事ワークショップや心と体のワークショップが催されたり、移住も実際に進行している。

現在直面している課題

家づくりは、設計士の市川さん、伝統工法伝承にこだわる地元の棟梁・河合さんの強力な無償ボランティア講師を得て可能になった。その分、講師・受講生とも求めるレベルやこだわりも高くなる。必然的に時間も費用も計画以上にかかることになり、工期も費用も倍以上かかることになった。どの辺で折り合いをつけるかが難しいが、それがまた楽しくもある。

今後やってみたいこと

地元と協働しての、土地探し、地域融和、仲間・資金集め（結と講）、職人探し、家づくりからエネルギー自給までの標準マニュアル的なものをつくって提供したい。3事例ぐらい経験すれば、どこでもできるよう標準化できるのではないか。素人でもできることとプロに頼まなければできないことを見極めて、心地よくシェアしていけたらいい。そこは地元のプロの出番ができるし、学びの場にもなる。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

地域の人材データベース、集落の作法集

チームオリジナルの質問

<質問内容> 地元との関係づくりで配慮したことは？

<答え>

導入に当たっては、地元のキーパーソンがきめ細やかに動いてくれた。少し距離を置いて見られていたが、学校としてはあえて何もしなかった。入居予定者が隣近所に関わっていくことに寄り添うことを優先した。上棟式では集落の人たちも集まってくれてお祭りのようになった。むらに子どもらの声が聞こえることが大きい。

チームオリジナルの質問

<質問内容> やってみて一番驚いたことは？

<答え>

受講生たちが何組か待ちきれずに、本格移住や仮移住など始めたこと。その過程で互いに助け合う仕組みや作法を自然に学び、つくっていったこと。

その他、伝えたいこと

定例会には100人の集落に子どもも合わせると50人くらい集まる。地域と世代をつなぐ村がこうしてできていくのかもしれない。広がりも深まりも運営も自然（じねん）に進んでいく。

写真



上左:上棟式 下左:腰板打ち 下中:親子で木酢液塗り 下右:近くの寺でぬかど炊飯 上右:竹小舞



おむすび通貨 一般社団法人 物々交換局

調査団体名	: おむすび通貨 一般社団法人 物々交換局	団体代表者名	: 吉田 大
設立年	: 2010(平成22)年	対応してくれた人の名前	: 吉田 大
団体URL	: http://www.f-money.com/	調査員	: 沖 章枝、松井賢子、長澤壮平
活動拠点	: 愛知県豊田市足助町	レポート作成者	: 長澤壮平
取材日	: 2013年11月21日		

活動内容

おむすび通貨の単位は、おむすび1つ程度のお米をあらわす「むすび」。1むすびは50円で、10むすび券もある地域限定のお金。

おむすび通貨は提携店で使え、有効期間は6カ月。有効期間を終えると、提携店は集まったおむすび通貨を地元農家がつくったお米と交換する。農家はそこで得たおむすび通貨を、事務局で現金と交換する。

地域のお米をおむすび通貨に換え、6カ月経つとまた地域のお米に換えられて地域の食べ物になるという、一連の流れをつくりだす。おむすび通貨という地域通貨を循環させることで、お米の地産地消を促すとともに人々のつながりをつくりだす。

お米がその土地の恵みとして生まれ、その土地で食べられるとともに、人々の温かい交換のつながりをつくろうという取り組み。

消費者がおむすび通貨を手に入れるには、イベントの『こども商店街』の際に購入、提携店での購入、物々交換局の事業への参加などの方法がある。

大きなイベントになっている『こども商店街』は、子どもが自ら店を出したり、警察官や放送局などさまざまな職業に就くことで、仮想的な商店街を開き、地域のつながりや、子どもの社会勉強を促す取り組みとなっている。

キャッチフレーズ

地域のお金が人のつながりをつくる

会のモットー(何を大切にしているか)

今、私たちは、あらゆるものの価値を価格で考えている。そのことで、ものに含まれているいろいろな人間的な価値が見過ごされてしまう。その合理主義みたいなものが、思いやりを失わせ、人のつながりを切断してしまっている。おむすび通貨の取り組みで、人がものを交換するときの温かさや思いのつながりをつくっていききたい。

あくまで地域の人自身の取り組みであって、おむすび通貨はその道具にすぎない。コミュニティーにはいろいろな人がいる。弱い人がいて、強い人がいて、わがままな人がいて、やさしい人がいて、むかつくやつがいて、それがコミュニティー。その中で助け合い、支え合いみたいなものを、一緒にゆっくりと合意形成をしていく。

設立から現在に至るまで変化したこと

最初は農家支援というところを全面に押し出して、無農薬の米を扱っていた。応援してくれる人もそういうことに興味ある人たちで、活動の規模が小さかった。しかし、環境運動やパフォーマンスではなくて、社会の仕組みが作りたかった。無農薬や自然農だけでは、本当にやりたいことができない。そこで、減農薬でもいいとしたり、提携店も、大企業は参入できないがパチンコ屋でもいいですよとした。徐々にかたちができるにつれて、本来目指していた形にシフトできてきた。環境運動とか啓発活動というよりも、まさに関わっている人たち自身の取り組みで、おむすび通貨はその道具になっている。

連携している団体・専門家・自治体など

豊田市の商工会議所青年部。豊田市内で150くらいの提携店を集めてくれた。

『とよたこども商店街』は商工会議所青年部が主催。私たちはあくまで企画の支援をやっている。

現在直面している課題

補完通貨の難しさは、一気にブレイクさせなくてはいけないところ。正直、提携店が500ぐらいにならないと貨幣としては機能しない。そこまで短期間でどうやってもっていくかというところ。今は上り調子でいる。

今後やってみたいこと

将来的には、紙幣の形態と電子マネーとの複合の形態にするつもり。その電子マネーの決済システムを数年以内に立ち上げようとしている。たぶん3年くらいかかると思うが、そうなったときは提携店が1,000くらいになっていて、そのときに融資事業を始めようと思っている。講のように、地域の身近な信頼が基盤になるもので、そこまでいけばやりたいかたちが出来上がると思う。

チームオリジナルの質問

<質問内容>これまでに実感できた成果は？

<答え>貨幣として本当に機能してるかといえばまだ難しいが、まずはイベントなどで子どもたちや親御さんがとても喜んだとか、提携店の人がおむすび通貨を持ってきた人と会話が弾んでうれしいとか、そういうことがよく聞かれるのがうれしい。

その他、伝えたいこと

社会の仕組みは自分たちでつくれるということ。世の中の仕組みで悪いことがあると文句ばかり言う人がいるけれど、自分たちでつくるんですよと言いたい。お金でいろいろな人が苦しんだり、いろいろな問題が生じているが、そのためのお金も自分たちでつくり、変えることができるということ。

写真



おむすび通貨



こども夢の商店街(名古屋市円頓寺商店街にて)

green maman

調査団体名	: green maman	団体代表者名	: 宇角佳笑、中根桂子、小松昌世、小黒敦子
設立年	: 2007年	対応してくれた人の名前	: 宇角佳笑、中根桂子、小松昌世、小黒敦子
団体URL	: http://ameblo.jp/green-mamann/		
活動拠点	: 愛知県豊田市	調査員	: 後藤伸也、蜂須賀 功
取材日	: 2013年11月26日	レポート作成者	: 蜂須賀 功

活動内容

green mamanは、朝市を毎月第4火曜日、豊田市寺部町の守綱寺で行っている。また、スーパーやまのぶ梅坪店「ママンズ キッチン ことり」では、惣菜や弁当、おやつなどを販売し、「green mamanのお気に入り」では、フェアトレード商品や朝市での商品を販売している。2014年1月からは、毎月第2木曜日に、タキソウ家具本店での朝市も開催している。

子育て中の主婦、宇角さん、中根さん、小松さんおよび小黒さんの4人が、田中優さん(反原発や平和活動を続ける文筆家)の講演を聞き、「私たちにも何かできるのではないか」という思いから、green mamanは始まった。「地域で循環」をもとに、エネルギー、人、お金、モノが地域でうまく回るような仕組み、持続可能な社会をつくろうと、まず、農業すなわち「食」からスタートする。

朝市を企画運営し、地域で野菜を作っている人(農業生産者)に出店してもらい、地域の人に野菜を売ろうとしたが、当時豊田市内では産地直売が中学校区単位で進んでおり、なかなかgreen mamanの野菜は売れなかった。そこで、ただ売るのでなく、商品の情報(作っている場所、人)や料理方法、「買い物は投票」という考えなどを併せて紹介するうちに、徐々に浸透していき、現在では野菜、米、パン、ジャムなどの食料品に加え、雑貨なども朝市で出店されている。

キャッチフレーズ

まちの中の結

会のモットー(何を大切にしているか)

朝市では、地域の良心的な農業生産者と消費者をつなげ、農家の思い、農作物の価値を消費者に伝えていきたい。また、環境・平和・衣・食・住・健康について、朝市、やまのぶでの「ことり」「green mamanのお気に入り」などの場を通して、気になったこと、興味を持ったことを学び合い、行動を起こしたり、発信していきたい。

設立から現在に至るまでに変化したこと

活動を続けるうちに、農業生産者と消費者に交流(つながり)ができ、ただ「買って終わり」だけでなく、作り手である農業生産者も、より良いものを作るきっかけになっている。

さらには、green maman、生産者と消費者、他団体との交流が深まり、現在ではメーリングリストでさまざまな情報を交換し合っている。メーリングリストも500人を超え、特に子育てのことでは、皆が助け合う感じになり、現代版「結(ゆい)」が育ってきた。

注:メーリングリストは、主に、豊田市近郊に住む子育て中のママが、子育てに役立つ情報を伝え合うツールとして9年ほど前にできたもので、登録する人たちでつくり上げられている。green mamanが管理するものではない。

連携している団体・専門家・自治体など

- ・スーパーやまのぶ(おかずや商品の販売など)
- ・守綱寺、タキソウ家具(朝市の場所の提供など)
- ・おいでん・さんそんセンター、千年委員会(他団体との交流)

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

定期的な朝市の他に、地元の大豆を使った味噌づくりや、徳山ダムの写真家・大西さん、名古屋大学准教授の高野先生を招いた環境講演会など、さまざまなイベントも行ってきた。

現在直面している課題

朝市を企画運営する際に、どうしても費用が掛かる。以前は、自分で費用を持ち出していたが、最近は農業生産者から出店料をもらい、最低限の経費を賅っている。

今後やってみたいこと

現在、自分たちでも田んぼを借りて米を作ることになった。自分で作るにより、米を作ることがいかに大変か、生産者の苦勞がわかり、価値観も変わってきた。また、米作りを通じ、いろいろな人との交流もでき、充実している。今、green mamanのメンバーで、マンの理解者でもある人に指導していただきながら米を作っている。今後は、私たちと同じように、指導してくれる方と市街の米作りに興味がある家族でグループをつくり、田植えや稲刈りだけのイベントではない“田んぼでお米を育てるグループ”がいくつかできていくといいなと考えている。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

里山の人で、米作りの指導をしていただける人(参加される家族をイベントの参加者でなく、お米と一緒に作る仲間として作業していただける人)。

チームオリジナルの質問

<質問内容>山間地域の振興で重要なことは何か。

<答え>私たちの朝市での活動のように、やはり林業においても「出口」、すなわち木を消費する仕組みが大切ではないか。木(材木)の需要があり、業(なりわい)として継続的に成り立つ仕組みが必要である。

また、地域間の連携ももっとすべきである。例えば、豊田市の旭地区はかなり先進的にさまざまなことに取り組んでいるので、設楽町など人づくりや空き家対策の面で一緒に何か進めればよいと思う。

その他、伝えたいこと

green mamanでの出会いをはじめ、現在ではさまざまな団体と交流し、多くの人と出会ってきた。「おひさまクラブ」という未就園児を対象としたグループやプレーパーク(冒険遊び場)の人と関わり、子育てに大変役に立っている。ここでは、子育てをみんなで助け合い、例えば、不要になった子ども服を提供したり、子どもの面倒を一時的に他のお母さんに見てもらったりなど、「子どもは地域で育てる」という感覚ができてくる。ここでは、子育ては大変だから2人目を産むのはやめようと思うお母さんはあまりいないのではないかと思っている。すごく居心地が良い場所である。まさに「子育ての好循環」が生まれており、当初始めた「地域で循環」から循環の輪が大きく発展しつつある。

写真



green mamanのメンバー



朝市の様子
(守綱寺にて)

農業生産法人 みどりの里

調査団体名	農業生産法人 みどりの里	団体代表者名	山中 勲
設立年	2008年	対応してくれた人の名前	野中慎吾
団体URL	http://okome.boo-log.com/		
活動拠点	愛知県豊田市	調査員	後藤伸也、蜂須賀 功
取材日	2013年11月15日	レポート作成者	蜂須賀 功

活動内容

スーパーやまのぶの山中勲氏が社長から会長に就任する際に、安全安心な食品を自前で提供したいという思いから、山中氏が退職金を投じて農業生産法人を立ち上げた。代表は山中氏で、社員は野中夫婦のほか2人おり、合計4人いる。

農薬、肥料を使わずに主に米、イチゴ等を栽培し、スーパーやまのぶ梅坪店の「ごんべいの里」(添加物・化学肥料・農薬などをできるだけ少なく、または使用しない商品)で主に販売している。

一般のほとんどの農家では収穫量の増加、農作業の効率化、市場への規格適合のため、農薬や肥料を使っているが、みどりの里では無農薬、無肥料を通じ、作物の本来持っている生命力、おいしさを引き出し、人間の体に良い農業を行っている。そのため、草取りや土壌管理などに苦勞するが、毎年試行錯誤を重ね、自然栽培の確立に取り組んでいる。

キャッチフレーズ

安全安心を食卓に

会のモットー(何を大切にしているか)

無農薬、無肥料を基本に、自然の力をそのまま引き出す農業の確立。

現在の農業は収穫量を増やしたり、害虫が付かないよう、肥料や農薬を使っているが、食物側からすれば、その行為は「人が余計なことをしている」と言えるのではないか。食物は本来、自然のルール(摂理)で育つものである。

無農薬、無肥料の農業は大変ではあるが、少量でも品質が高く、安全、安心な食物を提供している。

設立から現在に至るまでに変化したこと

当初はスーパーで米等を販売していたが、最近は個人の店に対しても宅配したり、無農薬・無肥料の食物が体に良いことから、患者の免疫力を高める総合医療の分野にも進出しつつある。

連携している団体・専門家・自治体など

- ・スーパーやまのぶ
- ・木村秋則氏(環境にやさしい循環型農業を目指す自然栽培を行い、無肥料・無農薬の米・野菜作りに挑戦)

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

山村再生を目的として事業を行っているわけではないが、産業として継続的に行っていくこと(プロとして提供していくこと)が大切と考えている。それが結果的に中山間地の再生につながると思う。

現在直面している課題

無農薬、無肥料の農業は、どうしても人件費が高くなり、採算をとるのが難しい。人を雇っても、年中仕事があるわけではなく、臨時的に人手が必要なおきのみ、雇える仕組みがあるとよい。

- ・やはり、草刈りが大変である。
- ・天候に柔軟に対応するのが難しい。

今後やってみたいこと

一時的に人手が欲しい場合に、柔軟に人を雇えるようにしたい。試みとして、軽度の障がい者施設と協力して、草刈りなどをお願いしている。

また、農業を始めたきっかけがオイスカでの国際協力の経験であるため、いつかは農業の国際貢献ができればいいなと思う。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

臨時的に障がい者を雇う場合、仕事の情報と人材の情報がマッチングするような仕組みが欲しい。また、障がい者を雇う際に補助金など行政からの支援がもっとあることが望ましい。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 中山間地でみどりの里のような自然栽培を中心とした農業を行うことができますか？

<答え> 物ごとには、「天・地・人」が揃っていないとなかなか進まないと思う。天はタイミングであり、地は土地である。したがって、自分のやっている自然栽培は、豊田市のような平野部でできることであり、これをそのまま山間地で行うことは無理だし、できないと思う。それよりも、山間地にあった農業があるのではないかと思う。例えば、養蜂、養鶏、家畜などが適していると思う。

その他、伝えたいこと

○自然栽培（無農薬、無肥料）で体に良いものを作り、食べてもらいたい。

・肥料（窒素）を入れる代わりに、根を大きくしたり、温度管理をして、自然の力すなわち食物が本来持っている力で育てる。

（腐敗のメカニズム）

肥料の投与 → 硝酸性窒素の発生 → モノの分解（腐敗）が促進

・人間は窒素を過剰にとると、アンモニア性窒素として排出できるが、植物はそれができないために、体内に取り入れ、それを落としかけて病気になってしまう。

・植物は本来光合成で空気からほとんどの養分をとっている。二酸化炭素と水で炭水化物を作っているが、窒素が入ることによりタンパク質ができ、炭水化物が分散され、炭水化物（糖、でんぷん）の薄いものができることになる。自然栽培を行うと、炭水化物がギュッとつまったおいしいものができる。

・品質が高く、腐りにくく、今までにないもの（全く別のもの）ができる。

・とてもおいしく、病害虫もつかず、品質も安定する。無農薬というだけで作りやすい。

写真



イチゴの栽培。おいそー！



作業風景



野中さんと木村さん。笑顔が最高

NPO法人 中部猟踊会・三州マタギ屋

調査団体名 : NPO法人 中部猟踊会・三州マタギ屋
 設立年 : 2005(平成17)年8月30日
 団体URL : <http://matagiya.jp/>
 活動拠点 : 愛知県岡崎市夏山町字外田
 取材日 : 2013年11月19日

団体代表者名 : 日浅 一
 対応してくれた人の名前 : 日浅 一
 調査員 : 井上祥一郎、西原 均
 レポート作成者 : 井上祥一郎

活動内容

看板は有害鳥獣駆除だが、額田の山の幸のありがたさを地域と子ども世代に伝えることが本筋。身の丈に合った解体所を、助成金に頼ることなく自力で設置している。鳥獣という資源保続(子獣は逃げる)を目的とした捕獲檻を開発し、2件の特許を取得している。この特許は誰でも自由に使えるようにしている。

会のモットー(何を大切にしているか)

命の大切さを「無益の殺生をしない」ことで伝えたい。野生資源を調整することが、地域のタンパク資源を有効に利用することにつながる。捕獲獣を殺すときも苦しめないように気をつけている。

設立から現在に至るまで変化したこと

世の中が有害鳥獣被害の防止から、野生鳥獣の肉を食材にする「ジビエ」をもてはやす風潮に変化したことから「ジビエ」指向で活動に加わりたい人が増えた。

連携している団体・専門家・自治体など

残念ながら上部団体の猟友会にも活動が理解されない。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

自然資源は常に大きな変動があり、その調整が地域資源の保続のため重要という観点であるので、1種の森林資源の活用という見方ができる。現場にはイノシシとシカがいるが、繁殖力の強いイノシシが中心になっている。シカの繁殖力では資源減少はすぐにくる。イノシシでは200kgを越す個体が、電柵破り等の教育をするので、大きな個体から捕るようにしている。200kgを越すイノシシはほとんど見なくなった。

現在直面している課題

後継者:活動に参加する若者は増えているが、「ジビエ」の流行に乗りたいという志望動機では任せられない。旨い「旬」は短期間という宿命がある。ダニアレルギーのある人は向かない。

今後やってみたいこと

現在の活動の継続(そんなに変わってはいけないと考えている)。地域の資源を地域の人が大切にすることが重要という発信をしていきたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

行政やマスコミがよく勉強すること。捕獲獣の報奨金を上げて問題解決にはならないし、ジビエ賛歌も表面的。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 捕獲獣の殺し方は？

<答え> 短時間に放血し、味に影響を与えない。

その他、伝えたいこと

イノシシ料理を観光資源とする温泉宿が愛知県にも多いが、ほとんどが猟師との直取引で買い手市場になっている。価格が安く、猟師を生業にすることを難しくしている。駆除で殺したイノシシ等は処分法が決められているので、温泉旅館に持ち込まれるものは、違法のイノシシ肉の扱いになる。猟師もここに持ち込んで、ここから正規のルートで流通させることを買い手側も考えること。行政の指導が必要。

野生獣の肉の臭みという問題は間違った情報。例えば、昔、渓流水に漬けることは、冷蔵施設や冷凍施設のない時代のことで、肉の腐敗防止法だった。それを「臭み」を抜く方法として今も語られることがある。子どもたちはここで肉を食べることがあるが、臭いという言葉は聞かれない。本物に出会って間違った情報が訂正されていくことは、成果の一つである。

写真



愛犬を手に日浅 一氏
(三州マタギ屋施設内で)



捕獲檻(シマウリは自分で逃げられるように配慮)



解体処理施設&大型冷蔵庫をバックに日浅氏と井上

岡崎森林組合

調査団体名 : 岡崎森林組合 団体代表者名 : 代表理事組合長 眞木宏哉
 設立年 : 2008(平成20)年(岡崎市森林組合と額田町森林組合が合併)。前身をたどれば1921(大正10)年設立の額田郡宮崎「河原土工森林組合」に行き当たる。
 団体URL : <http://okamori.org/> 対応してくれた人の名前 : 代表理事組合長 眞木宏哉
 活動拠点 : 愛知県旧額田町森林組合施設 調査員 : 井上祥一郎、後藤伸也
 取材日 : 2014年2月19日 レポート作成者 : 井上祥一郎

活動内容

人口、約38万人の岡崎市は古い城下町だが、23,300haに上る森林を擁する「森林都市」でもある。当組合は市内にあって、その森林のあり方に責任を負う希少かつ最大の専門技能集団である。制度的には森林組合法に基づく森林所有者の共同組織であり、地域の森林管理の主体として、施業集約化等により森林・林業の再生に積極的役割を果たすことが期待されている。

主な活動内容は、①地域最大の資源でもある森林の「保全整備」と「林産・素材等販売」、②地域の木材の利用が国土資源の保全につながり、流域の人びとの生命にも関わるという事実を踏まえた「木質社会の見える化」という息の長い地域運動である。具体的には、主伐・除間伐・下刈り、枝打ち・作業道作設・集材・造材・搬出・輸送・素材販売・毎木調査・選木・本数調整伐・林地境界(施業界)の画定・団地化説明会・造林事業提案書・・・多岐にわたる。

キャッチフレーズ

岡崎森林組合は、提案力・技術力・経営力で、ふるさとの森のチカラを活かします。

会のモットー(何を大切にしているか)

「のびやか」に活動すること。本組合の職員は以前と違って地元出身者は少なく、ほとんどがターンの人たちで占められている。若者も多い。彼らを引き寄せるのは「森の魅力とそれを発揮させる森づくりの意義」だ。自分たちが経験したような体験がない中で、お互いをのびやかに理解し合い、大切な岡崎の森を守っていくという使命感のもと、提案力・技術力・経営力の向上、共有に努めている。

設立から現在に至るまで変化したこと

この地域では、早くも明治43(1910)年に明治136(2003)年を目途にした長期にわたる森林計画(宮崎村有林事業計画書)を策定し、森林を村おこしのソフト・ハード両面にわたるエネルギー源として位置づけてきた。第2次世界大戦後の復興期やその後の拡大造林時期には既にかんりの蓄積を持っており、森林の地域資源としての貢献は特筆に値する。組合員は、先人の苦勞に感謝し、先見性に学び、さらなる森づくりに汗を流した。

山間地にあっても豊かな地域生活を支えてくれた森林だが、昭和39(1964)年の木材関税がゼロになった頃から材価低迷、森の資産価値の低落という環境下で荒廃の危機に瀕している。

現在では、組合員の所有森林に対する関心も希薄になり、経営・施業の意欲が著しく低下している。

連携している団体・専門家・自治体など

林業振興機構、森林林業技術センター、他の森林組合、三州マタギ屋など。
 岡崎市とはもちろん緊密な連携がある。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

①組合員のための組織、②絆、③森林整備・林産(材の販売)、④原価管理・安全管理、⑤山間地域を含め森林都市(市域の60%)、⑥情報共有、これらの点を意識して活動をしている。専門的になるが、高性能林業機械の活用、施業の団地化・集約化、路網整備等による素材生産性の向上に合わせ、採材・造林技術、販売営業力を高めることが、山村再生や担い手づくりに欠かせない活動である。

現在直面している課題

「組合の灯を消してはならない」が大前提であり、昨今の林業を取り巻く経済情勢の下では、経営の持続が課題である。そのためには、赤字決算を背負った組合の経営構造を変える必要があり、事業の選択と集中が欠かせない。歴史はあるものの、不採算であった木工部門を民間企業に有償貸与し、工場設備をデザイン力・企画力・営業力に活かしてもらえることを期待している。同様に製材部門も縮小した。

今後やってみたいこと

月並みな言い方になるが、まず森林施業の集約化・団地化である。3,000人に上る組合員の所有規模は概して小面積であり、個人単位の施業では森林再生は到底おぼつかない。そのためにも林地境界の明確化が急務であり、行政と連携して少しでも成果を上げていきたい。また、この地域では電力供給力が未熟な時代には、組合立の水力発電所が多く設置された時期があり、製材所や家庭に電力を供給していた歴史がある。水も森の恵みであるが、木質エネルギーも同様である。現在、豊田・新城・設楽・津具・東栄など7つの森林組合があるが、これらが協働すれば、木質エネルギーの安定的供給組織としても機能すると思う。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

林業界の低迷は、木の成長に要する時間軸の長さという宿命とそれに付随する安定的供給体制の不足に一因があるので、広域的な体制整備と情報収集、そのための人材確保とが不可欠になる。

チームオリジナルの質問

<質問内容>外国人による林地買取はないか。

<答え>山の売買はあるが、目が行き届いているので、現時点ではそのような事態は承知していない。列島改造が叫ばれた時代の遺産として、別荘地やゴルフ場がある。額田にも2カ所のゴルフ場がある。当初は流域への環境影響が懸念されたが、地域の雇用と活性化の上で一定の評価を得ている。岡崎市と豊田市の境に、県企業庁がトヨタテストコースを造成中だが、岡崎側は緩衝緑地、設備等は豊田市側で税収に大きな差があると取沙汰されている。

その他、伝えたいこと

イノシシなどの害獣被害が中間山間地に見られるが、市域にはシシ垣が延長50~60kmも残されている。石積みの壁の山側はオーバーハングするように積まれているなど、先人の工夫の跡が残っており、この復元を目的として「万足平を考える会」が発足した。地域の歴史の見直しになろう。

先に触れた明治136年計画について述べたい。山のポテンシャルを地域改革に活かそうとしたのが、初代宮崎村村長・山本源吉。明治中期、源吉は先進の八名郡山吉田村に学び、山焼き廃止、部落区有林の改良、造林奨励を進めた。山焼きが造林に切り替わり、500町歩の村有林が設けられ、明治43(1910)年「愛知県額田郡宮崎村有林事業計画書」が策定され、その30年後の昭和12(1937)年、植林が完了した。同計画書は総論、地況、林況、沿革、村治、地方経済、造林、保護、収支概定、結論の10章からなる。「収支概定」の章では明治136(2003)年度までの「理想収入」を掲げ、総額192万4191円89銭(現時点ではおよそ210億円)を見込んでいる。そして、皆で造林した山林を至宝として村民協力の下に経営していけば、卓越した財源を得、自治の発揚を図ることができると、森林経営の意義を説いている。「宮崎村」を受け継いだ現在の岡崎市域の山林の状況はどうか。市域の6割に及ぶ森林資源は、先人の望んだ地域の至宝に値する存在であろうか。健康な森と活力のある林業は、郷土岡崎が先進都市としての持続可能性を高め、強靱な立ち位置を確保する必須条件である。先人の志と実践に学びつつ、再生と活性化を探っている。

写真



眞木組合長



岡崎森林組合



愛知県産間伐材使用の看板



岡崎森林組合 製材所

おおだの森保護事業者会

調査団体名 : おおだの森保護事業者会
 設立年 : 2000(平成12)年
 団体URL :
 活動拠点 : 愛知県岡崎市榎山町
 取材日 : 2013年12月16日

団体代表者名 : 浅井董亮
 対応してくれた人の名前 : 浅井董亮

調査員 : 井上祥一郎、西原 均
 レポート作成者 : 井上祥一郎

活動内容

旧額田町の故郷の森ともいえる「おおだの森」が、燃料革命後の薪炭林の利用低下で手入れが不十分な雑木林に変わってしまった。第二東名高速道路のインターチェンジの設置が決まり、榎山町が玄関口にあたるので、シンボルとしておおだの森の整備が取り上げられ、行政トップの要請で活動が開始された。現在は、有志がサクラとカエデを植栽する活動を月2回の頻度で行うようになっている。その他、イベントとして4月の第2週に花見の会、新年に初日の出を見る会を開いたり、研修会として他事例を見学に行ったりしている。会員数は53人、現地作業は15名から20名程度。

会のモットー(何を大切にしているか)

おおだの森にサクラとモミジを植え、将来、サクラの名勝となる夢。
 無理を言わない、遅刻・早退も自由。それらの理由も聞かない。気持ちよく皆で力を合せて作業することを心掛けている。
 植栽樹種は、現地に以前からあるもの以外は植えないことに決めている。

設立から現在に至るまで変化したこと

立ち上げ時から2006(平成18)年までは行政主導であったが、岡崎市に合併してからおおだの森保護事業者会が主体となり、それを行政がサポートするようになった。

連携している団体・専門家・自治体など

岡崎市役所がほとんどであり、その他では福井県の「菜の花好夢店」と若狭での交流が続いている。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

先に書いた年2回のイベントのほか、岡崎市にある小学校の授業の一環としておおだの森体験や、岡崎の人間環境大学のゼミ、JAや地域社会教育委員会の歩け歩け大会などにおおだの森を活用してもらっている。また、岡崎市の環境まちづくり会議も年3回、おおだの森を活用している。

現在直面している課題

設立当初から見ると、植樹本数も増え2,600本となった。これらの手入れは除伐と下刈りであるが、散策路の草刈りやイベントもあり、人手不足の傾向がある上に、会員が高齢化や病気等で減少しており、新規会員を募集中であるがなかなか集まらない。

今後やってみたいこと

おおだの森では地元住民の理解で植樹させてもらっているが、今少し植樹できれば大変良くなる箇所が一部の反対者がいてできないため、これを何とか解決したい。同じ理由で周回道路が途中で止まっており、これも解決すれば素晴らしい山となると思う。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

上記問題は簡単なことでなく、人脈や情報があれば解決できるかはわからない。

チームオリジナルの質問

<質問内容>後継者はいるか。活動だけがをするようなことはないか。

<答え>会長の後継者なら候補者はいる。一昨年草刈り機による事故があったが、運良く大ごとにはならなかった。今後も安全第一で作業をするよう指導している。

写真



おおだの森をバックに浅井会長

取材者名

安藤里恵（おいでん・さんそんセンター）

井上祥一郎（伊勢・三河湾流域ネットワーク）

太田 司（やまおか木の駅）

沖 章枝（水と緑を守る会・岡崎）

蔵治光一郎（東京大学 大学院農学生命科学研究科附属演習林 生態水文学研究所）

後藤伸也（国土交通省中部地方整備局 豊橋河川事務所）

近藤 朗（愛知・川の会）

洲崎燈子（豊田市矢作川研究所）

鈴木啓佑（二井寺農園）

高橋伸夫（西三河野鳥の会）

田中五月（一般社団法人 ClearWaterProject ）

長澤壮平（豊田市矢作川研究所）

西原 均（国土交通省中部地方整備局 豊橋河川事務所）

丹羽健司（地域再生機構）

蜂須賀 功（岡崎市環境部 環境保全課）

浜口美穂（ライター）

眞木宏哉（岡崎森林組合）

松井賢子（伊勢・三河湾流域ネットワーク）

（五十音順）